
BLEACH in FLAME - 晩冬の踊り娘 -

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLEACH in FLAME - 晩冬の踊り娘 -

【Zコード】

N5405D

【作者名】

切香

【あらすじ】

FLAME=炎、激情、恋人。隊長になつたばかりの日番谷は、流魂街で美しい踊り娘と出会うが、少女共々望まぬ戦いに巻き込まれる。碎蜂・乱菊・市丸・更木・海燕など死神中心、ダークファンタジー中編。日番谷・オリジナルキャラで恋愛色が少しあります。オリジナル色も強いので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

1・紅の幕開け

女は微塵のためらいも見せず、刀を自らの喉に突きたてた。仰向けにのけぞったその喉から、声出さぬ断末魔の代わりのような血柱が、高く、高く青天に吹き上がった。

その血は、女自身を、地面を、そしてそれを眼前にした碎蜂の体を、しどごに黒く濡らしていく。

「う・・・」

それを見守る男の目が、ひとつ。何も映さぬ深い穴のように、その瞳には何も映っていない。音もなく、男の中で、何かが碎けるのを聞いた気がした。

仰向けに倒れる女に駆け寄るとして、男は立ち止まる。まるで操り人形のようにガタガタと不器用に震える体を、押さえつけるように。

その拳が、血管が浮き上がるほど固く錫杖を握り締めた。その口が、背後にいる僧達に怒鳴る。

「死神どもを、一匹たりとも生かして帰すな！－！」

打てば響くように、背後に続く法衣をまとった男たちが、錫杖を振りかざし雄叫びを上げた。

彼らの持つ錫杖から、恐ろしいまでの靈圧が放たれる。

そして、彼らは最早迷うことなく、碎蜂率いる隠密機動に一斉に襲い掛かつた。

一体・・・

碎蜂は、斬魂刀を構えながら思つ。

取り返しがつかない、泥沼の戦いが始まってしまったことは分かつていた。

どこで間違つたのだ？私達は・・・！

2・碎蜂、北へ

それより3日前。2月15日の夕刻のことである。

「よく来てくれたの。一番隊隊長・碎蜂よ」

「はっ！」

まばゆい夕焼けの光が差し込む第一番隊舎の隊首室で、碎蜂は山本総隊長の前に片膝をついた。

漆黒の髪を持つ、痩せた小柄な女である。

一見したところ、護廷十三隊隊長と隠密機動総司令官を兼任する身とは思えない。

しかしよく見れば、そのムダを潔いまでに斬りおとした体は引き締まり、全身それ自体が刃のように、鋭い靈圧を放つていることが分かる。

「お主の担当区域のひとつ、北流魂街で不穏な動きがあるのは知つておるか」

「は。新興宗教のことですぞいりますか？」

碎蜂は、視線を床に落としたまま答える。

「そうじゃ。ここに組する僧達が力を隠し持つて居るのでは、という報告が入つておる」

「力、とは」

「斬魂刀か、それに類する力じや」

碎蜂は、眉間にかすかに皺を寄せ、山本総隊長の顔を見上げた。

斬魂刀を持てるのは、精靈廷に認められた死神のみと厳しく定められている。

精靈廷に届出がない斬魂刀を所持するのは、死罪に相当する絶対の禁忌。

「すぐに隠密機動を動かし、調査いたします。もしも斬魂刀を発見した場合は・・・」

「直ちに精靈廷に拘引せよ。反抗した場合は、即時排除を命ぜる」
石のように確固とした総隊長の声が、碎蜂以外無人の隊首室に響き渡る。

「かしこまりました」

碎蜂は抑揚のない声でそう答えると、一礼し立ち上がった。

バタン、と隊首室の扉が閉まる音を背に、総隊長はかすかに息をつき、

その腹の辺りまで伸びた、白い髪を捻った。

そして、隊首室の窓に視線をやり、声をかける。

「待たせてすまぬな、日番谷隊長。お主も一つ頼まれてくれぬか」

その声に、窓の近くの扉を開け、入ってきたのは小さな少年だった。銀髪に夕日が差し込み、茜色に輝いている。

そして、その夕日の光も差し込まぬ、深い蒼碧の瞳をしていた。

* * * * *

是非も、善悪も興味はなかつた。

任務は遂行する。必要であれば誰であろうと殺す。それだけだ。

血も涙もない女だとか。

組織の傀儡かいらいだとか言う輩がいるのは知っている。

しかしそんな者どもは、死神たる矜持を見失っているに過ぎないのだ。

死神とは、ソウル・ソサエティが秩序を護り存続するための道具である。

道具に心などない。ただ命に従い、敵対するものは排除するだけだ。

そう・・・

碎蜂は、右手の中指に被せた、鋭利な刃物を見下ろした。

それこそが碎蜂の斬魂刀「雀蜂」。

どんな敵をも一撃で殺すことができる、暗殺に最も適すると呼ばれる愛刀だった。

その金色の光に、碎蜂はスッと目を細める。

「あとどれくらいで天道教の本山に着く」

「30分です」

碎蜂の後ろにぴたりとついた隠密機動のひとりが、無表情で碎蜂にそう返した。

日付は、2月18日午後。

碎蜂が総隊長から命をうけ、三日の時が流れていた。
その宗教団体に忍び込んだ隠密機動が、斬魂刀に比する力を持つと
いう事実を突き止めて戻ってきたのが17日の夜。
碎蜂はそれを聞き、直ちに100名の隠密機動を率い、その団体がある北流魂街へと向かった。

「奴らの力、護廷十三隊の一隊ほどの力はある、と言ったか
「は。隠されている靈圧なので正確なところはわかりませんが、測定ではそう出ました」

「よくそれほどまでの力を、隠し持てたものですね・・・別の隠密機動がそれを聞き、呆れたような声を出した。

確かに。

護廷十三隊の一隊ともなれば、通常ソウル・ソサエティ内に敵はない。

それだけの力を、一介の僧達が持つてているというのか?にわかには信じがたかった。

「彼らが持つのは斬魂刀ではなく、錫杖の形をしています。炎熱系の力を持つようです。人数は50名弱」

「炎熱系だと・・・?」

「氷雪系の死神に助力を請うべきでは・・・」報告を聞いた隠密機動の中に、どよどよと声が広がる。それを、チラリ、と碎蜂が冷たい目で睨みつけた。

「隠密機動たるものか、他の死神に助けを求めるべは任務も遂行できぬか。

できぬなら名乗りりでよ、今すぐ斬つて捨てる!」

その小さな体から発せられた尋常でない殺氣に、周囲は一斉に黙り込む。

碎蜂が冗談でそういうているわけではないことを、皆知っているからだ。

「油断するな。拘引できればよし、できぬなら、2人一組になつて1人ずつ殺せ」

だん、と碎蜂がその足を止める。目の前には、巨大な寺の門がそびえ立つっていた。

「天道教」門の上には、黒々と炭書きされた板が掲げられている。

門の前に立っていたのは、黒い法衣をまとった一人の男だ。
碎蜂を見るなり、目の色を変える。

「お前たち・・・死神、か?」

「分かつていいなら結構。

そして・・・斬魂刀に比する力を隠し持つことが罪であることも、
その様子だと分かつていいようだが?」

唇を噛んで黙つた男たちに、碎蜂は目の色も変えずに告げる。

「代表者を呼んでもらおう」

3・囚われの白羽

中々立派なものだ。流魂街にこれほどの建築があるとはな・・・。隠密機動ともども門内に通された碎蜂は、すらりと周囲を見やる。それは、確かに50人以上の人数は住めそうな、堅牢な木造の寺院だった。

「靈圧が、報告と違つ・・・」

ちつ、と碎蜂は心中舌打ちをする。
巧妙に隠されてはいるがこの気配。もしかすると、我らの力の総量をも上回る可能性がある。

そう思ったとき、やつ、と土が鳴つた。

「私がこの天道教の当主、天道清十郎といつ。お前達は死神と見受けられるが」

「死神、で結構。名前など必要ない」

中年か初老に見える、白髪の男。

顔には縦横無尽に皺が刻まれているが、意外と年齢は若いのかもしない、と碎蜂は見て取る。

その力は、恐らくこの寺院内で最も大きい。

「私とは比較にならんがな。」

天道清十郎という男の力が5としたら、始解状態の自分で7か8。瞬時に碎蜂はそう目分量をつけ、清十郎に向き直つた。

「斬魂刀に比する力を隠匿することは重罪だ！」

ただちに、力の源たる錫杖を我々に渡し、繩につけ！それが出来ぬなら力づくで拘引する」

寺内に朗々と響き渡つた碎蜂の声に、様子を伺つていた僧たちが、ぞろぞろと姿を見せる。

「横暴だ！」

「我々の事情も知らずに・・・」

「待て！」

死神達に近づこうとする僧たちを、清十郎が制した。

「死神よ。我らには、力を失えない理由がある。力を使わず、ただ持つてゐる理由がある」

「何を言つかと思えば、理由など。理由がなんであれ処遇は変わらぬ」

「ここに来る途中、村や町を見たか？」

清十郎は遮るように強い口調で言つと、碎蜂をまっすぐに見た。

「北流魂街では珍しいほど、栄えていただろう？」

それは下賤な輩が、我らの力を恐れて近辺の地域を襲えぬからだ。我らがもしも力を失えば、この地の平安は失われる」

確かに・・・と、碎蜂はやつてくる途中の町や村を思い出す。決して治安がいいはずがないエリアにしては、驚くほど栄えていた。街では子供が遊び、大人が談笑し、死の匂いはまるでしなかつた。

しかし・・・そこで碎蜂は考えを断ち切る。

「治安の維持は、死神の役割。貴様らの出るところではない」

「しかし、ソウル・ソサエティ全土を死神だけで護ることなど不可能だ！」

死神はそれを認め、我々のような民が自衛の力を持つことは認めるべきだ」

「精靈廷の規則は絶対だ！例外は認められない」

碎蜂はべもなく言い放つた。

対峙する清十郎はそれには答えず、一歩も引かぬ、という表情でこ

ちらを見ている。

じり、じり、と周囲の僧たちが間合いをつめてくるのが分かつた。

本気でかかると、厄介かもしけんな。

まともにぶつかり合つのは避けたかった。

実力が伯仲している以上、こちらにもある程度の犠牲が出るのは間違いないだろう。

ここで兵力を失えば、これから任務に影響が出かねない。

さて。どうするか・・・

そう思つたときだつた。

カラソカラソ、と下駄が石畳を鳴らす音に、碎蜂は鋭い一警を投げる。

そこにいたのは、紺色の着物をまとつた、顔に少し皺が目立ち始めた女だつた。

髪を結い上げ、地味な装いではあるが、凛とした気品が感じられる。その女が向けた視線が、清十郎を向いている。

そう思つた途端、碎蜂は地を蹴つた。

「まずい、逃げろ！」

清十郎の声が初めて動搖を見せる。

しかしその時には、すでに碎蜂は女の背後に回り、その喉元に斬魂刀「雀蜂」を突きつけていた。

「白羽！」
「シラハ

清十郎が一步踏み出し、女のほうに手を伸ばした格好のまま固まつた。

「貴様・・・！」

「妻を殺されたくないなら、錫杖を渡せ」

苦惱にゆがんだ清十郎を前に、碎蜂は無表情で言い放つた。

4・日番谷と乱菊

同日2月18日、正午。

日番谷冬獅郎は、部下の副隊長・松本乱菊と共に、天道教がある山の麓にある町にやつてきていた。

二人とも死神の制服である死霸装でなく、平服姿である。

「はい。お蕎麦あがりましたよー」

地味な茶色系だが、大振りな花柄の着物と、袴をまとつた乱菊が、笑顔で日番谷に丼を手渡す。

「ああ・・・」

受け取つた日番谷は藍色系の着物に、黒い袴をまとつていた。男にしては白い肌に、深い藍色が映えている。

端から見れば、姉弟にしては外見が違ひすぎ、親子にしては年が近く、友人にしては離れすぎている。

馴れ合いすぎているようにも遠くも見えない、言い表せない雰囲気をかもし出していた。

しかしさすがに、2人が死神で、上官と部下の関係などとは、誰も思はないだろう。

蕎麦からあがつた蒸氣が食欲を誘う。茶屋の机に向かい合い、2人は同時に箸を取つた。

「何事もないようだな」

日番谷は、茶屋の窓から見える山の中腹を見上げて言つた。

そこには、立派な瓦屋根の寺が小さく見えていた。

そこが彼らの目指す場所 天道教の寺院だった。

「碎蜂隊長だけで十分じやないですか？あたしたちがわざわざ来な
くたつて・・・」

「総隊長が言つていた。奴等が隠し持つてるのは、炎熱系の力つていつ可能性があるそうだ。いざとなつたら協力しろと言われてる」

ふーん、と乱菊は蕎麦をすすりながら、氣のない返事をした。

「だからつて、何であたし達、こんな口ソコソしてんんです？」

「こゝでは死神だつてばれたらまずい。後は想像しろ」

日番谷はそれだけ言つと、ズズつと茶をすすつた。

なるほど。

日番谷に言われるまでもない。

碎蜂は、他人に助けられることを徹底的に嫌うのだ。

そんな人物と協力すると申し出るなど、場合によつては侮辱と取られかねない。

中でも、半年前に隊長になつたばかりの日番谷を、碎蜂が対等とみなしていなことを、乱菊はうすうす感じ取つていた。

キャリアの短さだけではなく、その少年にしか見えない年齢、流魂街出身という経歴、その全てが碎蜂には認められないのだろう。

ただ、嫌悪のまなざしの中に、微妙な感情が見え隠れしているのを感じることがある。

自分も同じ感情を、ある男に感じたことがあるから分かる。

天才肌で、どんな試練もやすやすと乗り越えてしまう男に対して、天性の才能には恵まれなかつた自分が、時に感じた気持ち。

「はいお茶。お代わりあるよ」

そんな乱菊の思惑など露知らず、日番谷は茶屋の娘に茶を注いでもらつてゐる。

最もそんなこと、この隊長は氣づきもしないだらうけど。

ふふつ、と乱菊が微笑んだ。

その時、わああつ、と通りから歎声が上がった。

通りは縁日のような賑わいで、大勢の大人や子供が賑やかに行きかつていた。

「今日は縁日か何か？なんだか人が多いわね」

乱菊が茶屋の娘に声をかけると、娘は人懐こい笑みを浮かべて首を振つた。

「お客さん、この辺の人じやないね。この町はいつもこうだよ」

「平和ねえ」

「あそこのお寺さんのおかげだよ」

娘は、エプロンで手を拭くと、山の中腹の天道教寺院のほうを指差した。

「あのお寺の人たちが来てから、この町は本当に平和になつたのよ。お坊さん達の神通力で、私たちを護つてくれてるの。

みんなホントにの人たちには感謝してる」

「神通力つてどんなものなんだ？」

日番谷が聞くと、娘は首を捻つた。

「知らない、誰も見たことはないみたいよ。でも、野盗達はすぐ怖がつてるわ」

ふうん、と日番谷は彼には珍しく子供じみた返事をして、黙つた。

少なくともあの寺が、この町を平和に導いてることは間違いないようだ。

人を護る、という目的は、死神と同じはず。

それなら話し合つともできるのではないか、と日番谷は思つている。

最も、あの碎蜂が積極的に話しあいに応じるとは思えないが・・・

わああつ、と、ひときわ大きな歎声が上がり、日番谷と乱菊は思わ

ず店の外に田をやつた。

「行つて見ましょつよ、隊長！」

「おー、松本。俺たちは遊びに来たわけじや・・・」

「だからつて、ここに座つて茶飲むくらいしかあるひとないじやないですか！」

「どうせなら楽しまなきや」

苦笑する娘の手のひらにチヤリン、と金を落とし、乱菊は田畠山谷の

肩を押して通りへと向かった。

軽快な太鼓の音、そして鳴り響く手拍子。シャリン、と鳴る鈴の音が少しずつ近くなる。

「わつ、隊長、踊り娘さんが来てる！」

人ごみを搔き分け、乱菊が歓声を上げた。

自分より頭一つ分以上小さな田畠谷を、自分の前に押しやる。

「綺麗な娘・・・」

乱菊が思わずそう漏らすほど、その娘の容姿は整っていた。腰の辺りまである鳶色の髪は豊かに波打ち、娘の動きのたびに扇のよづに広がる。

大きな一重の瞳は濡れたように輝き、頬は桜色に上気している。袖がなく、白い腕は肩からむき出し。裾も極端に短く、太腿が露になっている。

緋色の着物から伸びる手足は、驚くほどすんなりと長い。

その真っ白い肌とあいまつて、女でもその境目にキリとさせられる。

華奢な手首や一の腕、足や頭につけた鉄製の飾りが、しゃらしゃらんと音を鳴らす。

太鼓の音にあわせ、伸びやかに長い四肢を躍らせ舞う姿は、人々の熱狂を呼んだ。

娘の瞳が、ふと田畠谷と乱菊に合わせられる。

田畠谷の蒼碧の瞳を見て、少しだけ娘は田を見開いた。

翡翠色の田はソウル・ソサエティでは滅多に田にすることがないからかもしれない。

しかし、娘はすぐに、田畠谷の田を見つめたまま、にっこりと口角

を上げた。

そして、ひときわ高く宙に舞う。群衆の中から口笛や歎声があがつた。

乱菊が見ると、日番谷は魅入られたように娘を凝視している。

あらまあ。仏頂面しても、やっぱり男の子ね。

ほくそ笑む乱菊を、日番谷は眉をひそめて見上げる。

「見ろよあの格好。若い女が腹冷やしたらダメなんじゃねえのか？」

ジ・・・ジジくさい・・・

乱菊が絶句している間に、娘の舞が終わつた。

沸き起つた拍手の中、息も弾ませずに着地した娘は、軽やかに頭を下げる。

前に置かれた桶に、一斉に金が投げ込まれた。

「あそこに金を入れるのか」

日番谷は見よう見まねで近づき、チャリン、と中に金を投げ入れる。それを見ていた娘が、背をむけた日番谷の腕をパシッ、と掴んだ。

「多すぎ」

日番谷の目を見て、一言もつづ。

乱菊が後ろから覗き込むと、確かにそれは、大道芸を見たにしては、異常に高い金額だった。

しかし日番谷はその辺の加減が分からないらしく、眉をひそめる。

「少ないより多いほうがいいだろ。大体2人分だ」

「2人分にしても多いの！」

「つるせーよ。いまさら戻すな」

娘の手を振り払い、日番谷が背を向けた時、人々から飛んだ声に、

日番谷はびたりと足を止めた。

「お前、寺の娘の癖にそんな格好してたら、親父殿に怒られるぞー。」

「なによー。あんな線香臭いお寺に籠るなんて絶対に嫌！」

「寺？」

日番谷が肩越しに振り返り、娘を見た。

「お前、寺の誰かの娘なのか」

「お前よそ者だな、この娘の父親は、あの寺の当主の天道清十郎様

だ」

「・・・」

日番谷は、言葉を止めて娘を見やる。

その数秒の間に、娘は身軽な動きでぴょん、と日番谷に歩み寄った。

「じゃ、たくさん貰つた分、あたしが奢つてあげる！」

甘味処あたしも行きたいし！そっちのお姉さんも一緒にいどいど！」

「あのなあ、俺たちは今食つたばかり・・・」

言いかけた日番谷の口を、すかさず乱菊がふさぐ。

「行く行く！」

「オイ松本、お前な・・・」

「ハナシ、色々聞き出せますよ」

その日番谷の耳元で、乱菊が呟く。

「大体つ、甘いものは別腹です！」

「知らねえよ・・・」

「決まりね！一押しのところ案内してあげる！」

娘はパーンと広がるような笑みを浮かべ、先に立つて歩き出した。

「おい女、俺たちはな・・・」

「女じやないつ！」

また逆鱗に触れてしまつたらしい。

娘はプーッと頬を膨らませて日番谷を見た。

「人を呼ぶときは、女！とか言わないの。

名前があるんだからね！名前で呼ばなきゃ」

「・・・お前の名前しらねーよ」

「揚羽^{アゲハ}。天道揚羽！いい名前でしょ」

さっきまでのふくれつらとは打って変わって、娘は明るい笑みを広げる。

根っから明るい性格らしい。

ころころと表情が変わり、ちょっととしたじぐさも機敏だった。

「あたしは松本乱菊よ」

ふたりにじーつと見つめられ、しぶしぶ口番谷が答えた。

「・・・口番谷冬獅郎だ」

「それにしても揚羽ちゃん。

あんた、なんで踊り娘なんてしてるの？

お寺の娘さんなら、そんなことしてお金稼ぐ必要ないでしょ！」
みたらし団子をもぐもぐ噛みながら、乱菊が隣に座った揚羽を見や
る。

揚羽は、「一杯目のせんざい」をすすりながら、「うーん……」
と考えるじぐさを見せる。

「お寺がね、あんまり好きじゃないの」

「線香臭いからか」

2人の女の食べっぷりに、げんなりしていた日番谷が揚羽を見た。

「やーね、言葉のアヤよ、それは」
ケラケラと揚羽は笑い飛ばした。

「じゃあ何よ？」

「力で周りを齧してたから」

「・・・穏やかじゃないわね」

乱菊が日番谷をちらりと見て、そう呟いた。

「でも、町の人たち言つてたわよ。

あのお寺のおかげで、町は平和だつて」

揚羽は、ウン、と頷いたまま黙つてしまつ。

常に笑みをたたえていたのが、複雑な表情に沈んだ。

「確かにその通りなの。

天道教のお坊さん達の力が強いから、外の人はこのあたりは襲つて
こない。

でもやつぱり・・・力で誰かを脅してゐるのには違ひはないでしょ?
無理やり力で押さえつけたって、いつかは更に強い力に負けてしま
うと思つてゐる。

だから・・・力は嫌い「

その言葉は、日番谷と乱菊を黙り込ませた。

それを見て、自分が余計なことを言つたのだから、揚羽は
再び笑顔を向けた。

「あたしはね。

もつと、誰が笑えるような、愉しくなれるような方法で平和にした
いの。

たとえば、私の踊りみたいにね」

そういうて、身軽に立ち上がり、狭い店内で、くるり、と回つてみ
せる。

「だから、お寺には滅多に戻らないわ。

自分でお金稼いで、ほとんどどこかで暮らしてゐるの」

「・・・そうか」

日番谷は、そういうて頷くと、大きくため息をついた。

「なによ冬獅郎、急に」

「揚羽。お前、しばらく寺には戻るんじゃないだ」

「え?」

揚羽が、きょとんと田を見開く。

乱菊が横から、日番谷を突ついた。

あまり色んな」とをしゃべるのはまずい、との田が言つてゐる。

そのときだつた。

ハツ、と日番谷は窓の外を見やる。

次の瞬間、

ドォン！！

大砲でも撃つたかのような大音響が響き、山々に木霊した。
「なに・・・」

通路にいた揚羽は、真っ先に外に駆け出す。

「お・・・おい、見ろよ！」

「寺が・・・」

人々がどよめきをあげ、山の中腹を指差している。
その先に見える瓦屋根は・・・かなり離れた町から見ても分かるくらいに、炎上、していた。

くそ・・・やっぱりタダじやすまなかつたか！

日番谷が歯噛みする。その視界の先を、赤い着物が舞つた。

「揚羽！待て！」

日番谷が手を伸ばす。

しかし、その指先がかすかに着物に触れただけで、揚羽は人ごみに隠れ、見えなくなる。

乱菊が、その隣へと駆け寄る。

「隊長・・・！」

「松本、俺は寺へ行く！お前はこの町を護つてろ！」
「分かりました。お気をつけて」

乱菊の声に、日番谷は頷く。そして、人ごみの中に身を翻した。

7・炎の反逆

それよりもわずかに前。

当主・・・天道清十郎は、砂蜂たち死神に背を向け、僧達に頭を下げた。

「すまん。お前達・・・」

手に手に錫杖を持った僧達は、無言で首を振り、清十郎の横を通り過ぎる。

そして、清十郎の妻、白羽に刀を突きつけたままの砂蜂の前に、次々と錫杖を投げ出した。

砂蜂に向ける瞳には、憎悪が籠っている。

しかし砂蜂は、眉一つ動かさなかつた。

憎まれることには慣れている。

清十郎は歯をぐつとかみ締め、最後に、自分の錫杖を山になつた上に放り投げた。

「当主・・・」

「清十郎さん!」

周りの悲痛な声に、深くうつむき清十郎はこたえない。

「さて。天道清十郎とやら。精靈廷まで来てもらおう」

砂蜂が後ろに視線で合図をすると、隠密機動のうち2人がさつと前に歩み出て、清十郎の腕を両側から掴んだ。

「貴様ら、こちらが黙つていれば・・・」

「やめる、お前ら!」

氣色ばんだ僧達を一喝したのは、清十郎だった。

そして、腕をとられて砂蜂のほうに歩み寄る。

「貴方!」

沈痛な沈黙に支配されたその場を、女の声が鋭く貫いた。

「白羽……」

清十郎がはっと顔を上げ、己が妻の顔を見つめる。

この女、何を……

砂蜂は白羽を捕らえたまま、清清しくさえ見える女の横顔を見やつた。

「初めて……貴方がこの下の町に来たときのことを、覚えています」

白羽は、砂蜂には目もくれず、清十郎だけを見つめて続けた。

「私は町に暮らしている小姑娘で。

あの頃の町は、生きるためなら殺しも盗みも黙認された。
そんなあの町に幸せが奪い合うものではなく、分かち合つものだと
教えてくれたのは貴方だった」

「白羽……」

「私たちがここで力を失えば、この地はどうなります?

今は力を捨てるときではあります。今こそ力を手にするとせ」

白羽を見守る清十郎の表情が、凍り付いていく。

「お、白羽、お前まさか……」

「どうか。諒めないでください。貴方……」

「やめる白羽！」

刹那。

白羽は、自分に刃を突きつけている砂蜂の手を両手で握り、一気に
自分の喉へとつきたてたのだ。

「しり……は」

駆け寄りかけた清十郎の頬に、白羽の喉から吹き上げた血が散った。
スローモーションのようにゆっくりとした動きで、白羽の体が弓な
りにしなり、仰向けに倒れてゆく。

「お・・・

ようめきかけた清十郎が、ぐつと地を踏んだ。

まずい！

砂蜂は白羽から手を離し、清十郎に向かつて駆け出す。

「おおおおお！」

ダン、と清十郎の足が地面を蹴る。

そして一足飛びに地に投げ出された錫杖の山に手を伸ばす。

砂蜂が雀蜂をかざし、清十郎の間合いに入った、と思つた刹那。ガツ、と清十郎の手が錫杖を掴み取る。

固く、固く錫杖を握り締める手に血管が浮いた。

「貴様・・・」

砂蜂が叫んだ瞬間、彼女を見返した、清十郎の瞳。

獸だ・・・！

いや、人でなければ、こつは狂えぬ。

砂蜂は無意識に、背後に下がろうと一回足を止めた。

「おおおお！」

清十郎が錫杖を砂蜂に向け、一閃させた。

「うう・・・！」

砂蜂の小柄な体は錫杖の一振りに吹き飛ばされ、後ろの壁に強かに体を打ちつけた。

断ち切れそうになる意識を振るい起こし、衝撃にしびれる体が地面から引き剥がした。

顔を上げた砂蜂が見たのは・・・炎の海と、その中でもだえる隠密機動の姿。

そして、喉をかきむしって倒れる隠密機動の傍でゆらりと立ち上がり、また一人、また一人と錫杖を手に取る法衣の男たち。

一番奥には、白羽の亡骸を抱きかかえ、地に膝を着いた男・・・清十郎がいた。

「許さん・・・」

ゾッ、とした。

千以上の死線を潜り抜けてきた、砂蜂である。

清十郎は白羽を地面に寝かせ、錫杖を大きく振りかぶり、砂蜂に突きつけた。

「死神どもを、一匹たりとも生かして帰すなーー！」

「おお！」

僧達の雄叫びが、間髪射れず清十郎に答え、怖氣づいた隠密機動に襲い掛かった。

「退け！一旦退け！」

碎蜂の叫びに、動ける隠密機動たちが、一斉に碎蜂の周りに集まる。

ちつ、まともに動けるのは、せいぜい二十人か・・・わずか十五分ほどの間に、実に八十人がやられた計算になる。たかが流魂街の人間だ、と高をくくっていたことも、あるかもしない。

しかし、まさかこれほどとは・・・

碎蜂はぐつと歯をかみ締め、目の前の光景を見つめた。

あたり一面、火の海だった。

そして、燃え盛る炎の中、一步一步こちらに近づいてくる僧達の姿。

「ひいい！」

隠密機動たち数人が悲鳴を上げて下がるのを叱咤できないほど、その光景は異様だった。

炎の中にいても、この錫杖の遣い手たちは全く熱さを感じないらしいのだ。

この寺院にも何らかの結界が張られているらしく、炎に包まれてはいるが燃え落ちはしない。

使い手がそれぞれ別の力を持つ斬魂刀とは違い、その力は全て炎熱系。

そして、遣い手が集まることで、その力は増幅され、斬魂刀をも上回る・・・

「死神の調査はしていてな。貴様は護廷十三隊一番隊隊長、そして

隠密機動総司令官の碎蜂だな。

体術が得意で、それを利用した斬魂刀を使う。

が・・・長距離で相手が多い戦いには不向きだ

立ち上がり、指に取り付けた斬魂刀をかざした碎蜂に、清十郎が言う。

その聲音は表面上は平静に見えるが、中では熱く煮えたぎっているのが、かすかに震えた声から分かつた。

「下級貴族出身。名家の姫君だった前総司令官の失踪により、やむなく代理で選ばれたと聞いたが・・・

噂は本当のようだ。腕も器も足りぬ

その言葉に、ピクリ、と斬魂刀を構えた腕が動く。

そして間髪入れず地を蹴つた。

清十郎が構えなおすよりも早く、瞬歩で清十郎の眼前まで移動する

と、横ざまに蹴りを放つ。

「ちつ！」

清十郎がとつさにかざした腕で攻撃を防ぐ。そして、碎蜂の足首を

ぐつと掴んだ。

その碎蜂の表情を見やつた清十郎が、呟く。

「死神とて、感情に心奪われることがあるのだな」

「黙れ！」

碎蜂は下がるどころか、逆に前に出了。

逆の足で蹴りを放ち、更に受け止められると、両腕で突きを放つた。

まともに胸に攻撃をくらい、さすがの清十郎も後方に下がる。

更に突っ込もうとした碎蜂を、周囲から放たれた炎が遮り、歯噛み

しながら後方に下がった。

死神とて、感情に心奪われることがあるのだな

今しがた言われたその言葉が、逆に碎蜂の心を冷やした。

感情に縛られるなど、死神として最も恥ずべき行為。

「司令官！」

悲鳴じみた部下の声に、碎蜂は周囲を改めて見回した。

「止むをえん。この場から去るぞ。このままで勝ち田はない」

その碎蜂の声を皮切りに、次々と隠密機動たちの姿がその場から搔き消える。

「逃げるか！」

清十郎が炎の中から飛び出した。後を追おうと駆け出した瞬間、その足がピタリと止まる。

この力は・・・

森の中を駆ける、足。

銀色に輝く、逆立つた髪。

懐から、小さな針のようなものを取り出す。

その針が、一瞬で一振りの刀に、姿を変えた。

その刀の持つ靈圧に、清十郎は反射的に背後を振り返った。

「深追いするな！」

「清十郎さん、しかし・・・」

「いかん、もう一人死神が加わった」

「何を言っているんですけど、死神の1人くらい・・・」

「隊長格の1人に、氷雪系の遣い手が現れたと聞いたが、この靈圧・

・・多分その者だ。

我らの天敵になりうる能力。お前達を無碍に死なせることはできん

「で、でも・・・」

「いいんだ。あいつもそれは望まない」

清十郎の周囲に集まつた僧たちが、視線を寺の奥のほうに向ける。

清十郎はそれには無言で、ゆっくりと、ゆっくりとそむけりへ歩み寄

つた。

そこへ、眠るよつて寝かされている白羽の体を抱き上げ、自分の袖で、その顔を汚した血を拭つた。

その人形のような白い顔には、苦悩はない。
最期を見せた、あの清清しい表情のまま。

「白羽。お前は・・・分かつていいない」
その顔に泪を落としながら、呟いた。

「町なんて・・・本当は二の次だつたんだ。

ただお前の前では、聖者でいたかつただけなんだ。お前がいなければ・・・

こらえきれぬ涙が、その頬を伝つた。
炎がその涙を巻き上げ、散らしてゆく。

その時。

「どうじよとこれまでとは違つた声があがつた。

「揚羽様！」

「お嬢さん！」

清十郎は白羽を膝の上に抱き上げたまま、庭を見やる。

「何事なの、これは？」

そう言って小走りに、炎がまだ残る庭を走り抜ける揚羽の目と・・・
清十郎の目があつた。

清十郎を見た途端、その目の光が安堵で和らいだ。

「父様、無事で・・・」

その言葉が言い終わるよりも先だつた。

揚羽が、その父親に抱かれた骸に気づいたのは。

「なんなの・・・？」

僧達が深く頭を垂れ、揚羽の前に道を譲った。

その僧たちの決して合わせぬ視線が、これが幻でないと知らしめたのだろう。

ひゅつ、と揚羽が息を飲み込むような音が響いた。
それはかすかだったが、布を無理やりに引き裂くような、苦しい悲鳴だった。

ざつ、ざつ、と、灰を巻き上げながら、揚羽は父親に歩み寄る。

その目は、焦点があつていなかった。

それを見つめる僧達の中から、啜り泣きが漏れた。

「なんなの、これ・・・」

揚羽は音もなく、母親の傍らに膝をついた。

そして、まだ血のあとが残る頬に、その手のひらをゆっくりと当たった。

その頬から、音もなく次から次へと涙が滑り落ちる。

「かあ、さま・・・」

「揚羽お嬢様。白羽様は、死神に人質に取られ、そして・・・自らの首を」

揚羽の後ろまで歩み寄った僧の1人が、微動だにしない揚羽の肩に手をやつた。

「すまん、揚羽」

清十郎が、目の前の娘に、ぽつりと言つた。

握り締めたその拳が、激情にガタガタと震えていた。

「・・・」

揚羽は、無言でスッと立ちあがつた。

そして帯の後ろに手をやり、そこから、小さく折り畳まれた錫杖を

取り出す。

カシャン、と音を立て、それが一振りの錫杖に組み立てられる。

「待てつ、揚羽！」

清十郎が手を伸ばしたが、その手は間に合わない。揚羽はあつという間に身を翻し、寺を飛び出した。

9・氷炎、相対す

無様だ・・・

森の中を走りながら、砂蜂は唇を噛んだ。
連れてきた隠密機動の半分以上は殺され、更に半分は重傷を負つて
いた。

この傷で、追いつかれれば全員の命が危ない。
虚なら、せめて他の死神ならいざしらず、流魂街の住人ごとに負
けるとは。

自分の弱さが憎かつた。

「大丈夫かつ！」

力尽き、地面に膝を着いた一人に、隠密機動の1人が足を止める。
それを見て、砂蜂は大声で叱咤した。

「何をしている、動けないものは置いていけ！共倒れになりたいか
！」

「その冷たさで。母様も殺したのか？」

突如、女の声が森の中に響いた。砂蜂はハツとして上を見上げる。
その視界に一瞬、黒い影がうつる。

「何者か！」

誰何する砂蜂の声を無視し、影は一直線に砂蜂に向かつて急降下し
てきた。

「待て！」

砂蜂の前に、隠密機動2人が立ちふさがる。

ヒュンッ！！

風を切る音が一瞬響いた、と思った直後、錫杖が弧を描く。

小さな影が2人の間に飛び込んだと思つた瞬間、錫杖から炎が噴出した。

「ぐおつ・・・」

隠密機動たちがその場から吹き飛ばされる。その間わずか1秒足らず。

「覚悟つ！」

そして、風を捲いて飛び掛ってきた人影の一閃を、からうじて砂蜂はかわす。

刀を構えた砂蜂の5メートルほど先に、その人物は着地した。足音もなく自分に歩み寄る人物を見て、砂蜂は目を見開いた。

「こ・・・子供？」

女、だつた。しかも、大人というよりも少女に近い年齢だった。

「私の名は揚羽。天道清十郎と白羽の娘だ！」

揚羽の、まだあどけなさの残る顔は、純粹なまでの怒りに塗りつぶされていた。

激情に反応するかのように、錫杖に、その腕に、全身に、炎が絡み付いていく。

その靈圧に、ビリビリと空気が振動する。

こいつは・・・

砂蜂は、暑さのためだけでない汗を、額から拭つた。

ドクン、ドクン、と心臓が打つ音が聞こえる。

本能が警鐘を鳴らしているかのように、それは全身に響いた。

天道清十郎じゃない。最も強いのは・・・まさか

「母様を殺し、父様を苦しめたのは、お前か」

炎が砂蜂の肌をちりちりと焼いた。

これほどの実力者が、力を使つこともせず、静かに野で暮らしてい
たというのか・・・

天才、というやつか。

ぎりり、と砂蜂は歯噛みし、やや置いて言つた。

「否定はしない」

「なぜだ！」

揚羽は大きく一步踏み込み、錫杖を繰り出す。

砂蜂は右手の斬魂刀でそれを受けた。

「ちつ！」

すぐさま炎を吹き出した錫杖に舌打ちし、横から蹴りを放つた。
揚羽は身軽な動きでそれをかわし、上空に飛び上ると、枝の上に
着地した。

すぐさま後を追おうとした砂蜂だが、突如襲つた足の痛みに、歯を
食いしばる。

清十郎が繰り出した、初めの一撃で負つた傷だつた。
今頃になつて、じわじわと体の動きを奪つてくる。

「なぜか。だと。

ソウル・ソサエティの秩序を護るのが死神の役割だからだ」

揚羽は、砂蜂を見下ろし、眉間に皺を寄せた。

「それは答えになつてない。

死神の役割なんてどうだつていい、私はお前に聞いてるのよ
なに。

娘の言い放つた言葉に、砂蜂は瞬間、言葉を失つ。

「閃け・・・『狂炎』」

ハツと砂蜂が我に返つたとき、その目が捉えたのは、自分にまつす
ぐに切つ先を突きつける揚羽の姿だつた。

その錫杖から、これまでとは桁違ひの炎が噴出す。

避け切れん！

受けるには強すぎ、避けるには速過ぎる。そのくせ永遠にも思われる瞬間だった。

死・・・

「霜天に座せ、氷輪丸！」

涼やかな声が、その場を貫いた。

巨大な氷龍が砂蜂の後ろから飛び出し、炎と正面からぶつかり合つ。轟音と共に、水蒸気がその場に噴出し、一瞬何も見えなくなつた。靄の先に、砂蜂は自分の前に立つ小柄な少年の背中を目にして、歯噛みした。

「日番谷・・・冬獅郎」

少年は碎蜂を顧みることなく、前を見据えている。

ひゅうつ、と、風が吹き抜け、水蒸気を拭い去つていく。

微動だにしなかつた少年の肩が、その時ビクリ、と跳ね上がつた。正眼に構えた刀を下ろすのを見て、碎蜂は眉をひそめる。

「揚羽・・・」

「と・・・冬獅郎?」

晴れた視界の先に佇む互いの姿に、2人はあっけにとられた顔で立ちすくんだ。

「なんで、ここに」

いきなり電源を抜かれた人形のように、揚羽は錫杖を持った手を脇にだらりと下げて、一步步み寄ろうとした。

そのときだつた。

「日番谷隊長!なぜここに・・・!」

隠密機動の1人が、ほつとした声を上げて日番谷に駆け寄つた。

「隊長・・・?」

その言葉に、揚羽の足が止まり、その場に凍りついた。

「隊長つて、どういうこと・・・?」

揚羽の白い拳が、ゆっくりと錫杖を握りなおす。

日番谷は、ゴクリと唾を飲み下した。

「俺は・・・護廷十三隊の隊長の1人」

揚羽が、ゆっくりと錫杖を体の前にかざす。

日番谷が、ざつ、と体勢を低め、斬魂刀「氷輪丸」の切つ先を持ち上げる。

「・・・そう。敵、だつたのね。あなたも」
パキン、と氷の割れる音が響く中で、その声は消え入りそうに小さかつた。

ギュッと目を閉じていた揚羽の瞳が、ゆっくりと開けられる。

眦を決して続けた。

「私は、天道家のただ1人の娘。次代当主を継ぐ女」

「揚羽！待て・・・」

日番谷がぐつと歯をかみ締め、刀を握つていらないほつの手を揚羽に伸ばした。

「立ち塞がるならお前も敵だ、死神！」

伸ばした腕が、あつという間に炎に捲かれる。

「ぐつ・・・」

日番谷が腕を押し立てて飛び下がるよりも早く、揚羽は日番谷の間合いに飛び込んだ。

ガイン！！

激しい金属音と共に、紅く火花が飛び散つた。

片手の日番谷は、両手で押し込んでくる揚羽の錫杖にじりじりと押される。

「なぜだ揚羽！戦いは嫌いだつてさつときつたばつかりだらうが！」

氷輪丸が、日番谷の叫びに呼び起されるように青白い光を放つ。途端、パキパキと音を立て、揚羽の錫杖が刀と交差したところから、凍り付いていく。

「その女が・・・！」

揚羽が歯を食いしばり、2人は飛び離れた。

氷のカケラと炎が周囲に待ち散らされる。

「その女が！母様を殺したんだ！絶対に許せない」

「…」

日番谷が弾かれたように振り向き、背後の碎蜂の顔をまじまじと見つめた。

「碎蜂。それは…」

「事実だ」

目を見開いた日番谷に、淡々と碎蜂は告げた。
そして、雀蜂を構え、ざつと前に出た。

「そこをどきなさい。私にはその女を殺す理由がある」
碎蜂の視線の先には、自分に向かって歩み寄る揚羽の姿。

「何でだ…」

日番谷の呟きが、揚羽の母を殺したという碎蜂に向けられたものか、
豹変した揚羽に向けられたものかは、分からぬ。

ふたりの女が、弾かれたバネのような動きで地面を蹴る。
その錫杖から放たれた炎が自分を襲つても、日番谷は動かなかつた。

「どけっ！！」

碎蜂がその日番谷の肩を掴み、手荒に押しのける。

碎蜂と揚羽の武器が交差した時だつた。

「揚羽！」

その声に、揚羽がビクリ、と肩を跳ね上げ、初めて後ろに飛び下がつた。

「父様！」

「ここは一旦退け！揚羽」

ざつ、と木の枝から地面に飛び降りた清十郎が、揚羽に歩み寄る。
その後ろには、何人かの法衣をまとつた僧の姿も見えた。

それとほぼ同じくして、

「隊長！」

瞬歩で現れた乱菊が、日番谷のすぐ近くに膝を着く。

「松本、お前・・・」

「申し訳ありません、隊長。町は異常ありません。

こちらで激しい靈圧のぶつかりあいを・・・」

そこまで言つた乱菊は、自分を見つめる田に『炎』がつく。

「あ、あんた・・・」

揚羽は、乱菊から視線を落とすと、無言で背中を向け、清十郎の下へと歩み寄つた。

「覚えておけ、死神」

清十郎が錫杖を構える。

その隣に立つた揚羽も、顔を伏せたまま錫杖の切つ先を持ち上げた。

「我々は力を手放す気はない。認めぬならかかつてくるがいい。

ただし、消し炭になつてもよいならな」

その清十郎の言葉からは、微塵も迷いは感じられない。

その言葉に顔を上げ、ちらり、と揚羽は冬獅郎を見た。

まるで泣いているように、その瞳に光が渡つた。

「待て・・・！」

一步日番谷が踏み出す。

それを拒絶するかのように、清十郎と揚羽は同時に錫杖を大きく振りかぶり、3人に向けて振り下ろした。

「くそ・・・！」

3人の視界が炎で埋め尽くされ、日番谷はとつとつに2人の前に飛び出すと、氷で炎をなぎ払つた。

「隊長！」

日番谷が刀も構えず、水蒸氣の中に飛び込むのを、乱菊は啞然として見た。

いつも自分の何倍も慎重で、冷静に事を運ぶ日番谷が、初めて見せた「焦り」。

やがて、水蒸気が晴れた先に見えたのは、たった一人で両拳を握り締めて立ちつくす、日番谷の背中だった。

日番谷は、足元でまだブスブスとくすぐつていてる雑草に視線を落とし、ぎりつ、と歯をかみ締めた。

「碎蜂、お前！」

振り返りざま、そこにいた碎蜂の胸倉を取った。

「あの一族に何をした！あの一族は、ただ流魂街を護つとしてただけじゃないか！」

それを・・・

碎蜂は自分の着物を掴んだ日番谷の手を無表情に見やると、パシン、とその手を払いのけた。

「斬魂刀に類する力の隠匿、という死罪を犯している以上、討伐するのには当然だろ？

秩序を護るのは我らの任務だ」

「違う！俺たちの仕事は、人を護ることだろ？！――分かり合つことだつて出来たはずだ！」

碎蜂は言葉を止め、強い瞳で自分を睨みつける日番谷を見返した。その表情に、混じりけのない敵意が浮かぶ。

「分かり合つとは、敵の娘に手も出せず、無様に立つていてることを言つのか？」

わざと私が突きのけなければ貴様など、今頃骨も残らず燃え尽きて

いる

ぐつ、と日番谷は返す言葉に詰まる。碎蜂は更に言い募つた。

「敵を倒す覚悟もないなら、隊長の資格は貴様ではない！」

「碎蜂隊長、言葉が過ぎます！――」

2人を押しのけるように、乱菊が2人の間に入り込んだ。

「いい度胸だな、松本。私に意見するなど」

乱菊は無言で碎蜂の小柄な体を見下ろした。しかし、2人の隊長格の殺気に挟まれ、その額にはあつという間に汗が浮かんだ。

「やめる。もういい」

日番谷が、乱菊の腕を掴み、自分の側に引き寄せた。

「隊長・・・」

「俺は護ると決めた奴は絶対に護る。俺にとつてそれが死神になつた理由だ。

それができないなら、死神も隊長も、こちらから願い下げだ」

碎蜂は冷たい目で日番谷を見返し・・・

やがて、かすかにため息をついて視線を逸らし、2人に背中を見せた。

「こ」の事態を精霊廷は放つてはおかぬ。

総隊長の結論を聞けば、貴様も分かるはずだ。死神の矜持とは一体何かとな

それだけ言つと、碎蜂はざつ、と2人に背中を向けた。

2月18日、夜。

厳寒の隊首室で、一から十三番までの隊長が一同に会する、臨時の隊首会が行われていた。

一番奥に立つのは山本総隊長。総隊長から10メートルほど離れた場所で、日番谷と碎蜂が跪いていた。

その2人の両側には、そのほかの隊長が立ち並び、碎蜂の報告に無言で耳を傾けている。

「なるほど、」

碎蜂が語り終えた後、しばりく無言だった総隊長が、タン、と軽く杖の先で床を打った。

「なるほど。その者ども、一度剥いた牙を納めはしまー」「総隊長！」

それを聞いた日番谷が、スッと立ち上がった。

「彼らは、決して精靈廷に刃向かうために力を手にしていたわけではありません！」

「しかし今は違う」

「ですが、話し合わず、いきなり刀を返すのは・・・」

「話し合いが通じる時期は過ぎておる!」

「いつ攻め込んできてもおかしくない状況なのだ。異議は認めぬ！」

「総隊長!」

なおも日番谷が言い募らうとした時、その袖を京楽がすばやく押された。

日番谷が見返すと、京楽は口を開じ、軽く首を振った。

「もう戦争は始まつてしまつてるんだよ。

一回りした歯車を止めることは極めて難しい。・・・不可能な
くらこにね」

「碎蜂隊長！」

総隊長が、跪いたままの碎蜂に声をかけた。

「此度の失態の挽回のためにも、お主に指揮を執つてもらう。

隠密機動100名でも完敗した敵じや。遠慮なく隊長格を連れてゆけ

け

碎蜂は、ざつ、と自分の両脇に立つ隊長たちに視線を走らせた。

「更木。市丸。そして浮竹。おぬしらで先陣を切ってくれ」

更木は、それを聞きニヤリを笑った。

「かまわねえよ。退屈しのぎにはピッタリだ」

「退屈しのぎになればいいけどなあ・・・」

口角を上げて返したのは市丸。細いその目からは、感情がうかがえない。

浮竹は、田をつぶつたまま、無言で頷いた。

「そして・・・」

碎蜂の感情を伴わぬ目が、田番谷を捉えた。

その頃。

北流魂街の天道寺では、清廉な空氣の中、座敷に寝かされた母親の死体のそばから離れない揚羽の姿があった。

「母様・・・！」

その胸にすがり、何度も何度も名前を呼び、終わりない涙がその頬を伝つ。

清十郎が揚羽の隣で立ち上がり、傍で絶句していた僧達を振り返つた。

精靈廷では、張り詰めた空氣の中、隊首室に響き渡る言葉にぐつと拳を握り締めた田番谷の姿がある。

逆らう可能性があるものを根こそぎ殺して、殺して・・・
そんなことで、ソウル・ソサエティの平和は護られるのか?
握り締めた拳が震えるのを、碎蜂は田の端に捉えていた。

「明日が出陣じゃ」

その日番谷の疑問を断ち切るように、総隊長が締めくくる。

囁らずも同時に、2人の長の声が重なつていた。

「死神どもを殲滅せよ！」

「全力を持ち、天道教を殲滅せよ！」

何事もなかつたように毅然と振舞つていた母が、物陰で眼に着物の袂を当てるのを見た。

私は、自分の足元に横たえられた棺に視線を落とす。

そこには、まるで苦しみから解き放たれたかのような顔をして、ただ横たわる少年の姿。

あれは・・・私の、五番目の兄だ。

これで、蜂家に生まれた私の五人の兄は、全て隠密機動の任務中に、命を落としたことになる。

恥ずべきことだ。

そう思つた。

貴族の子として名を上げることもなく、ただ死んでいった兄たちが。

傷だらけの腕を、壁に打ちつける。修行しても、修行しても伸びぬ自分自身が許せず、憎くてたまらなかつた。

打ち碎きたがつた。下級貴族としての、弱いつまらぬ血筋を。

「碎蜂」。

その時、私は自分の名を捨てた。

やはり、下級貴族だからだ。

そう陰口を叩かれ、期待もされず、ただ上に立つものたちを見つめていた。

才能がなくても、たつた一人でも、必ずあの場所に行つてやる。しかし、努力の末に隠密機動総司令官の座を勝ち取つた後も、いわれる言葉は変わらなかつた。

なにがある度に、こう言つ輩がいることを知つてゐる。

やはり、下級貴族だからな。先代の夜一樣ののような訳にはいくわけがない。

「馬鹿な奴等だ・・・」

人知れず、碎蜂は呟いていた。

自分を食い殺すような眼で見た、天道の娘を思い出す。

あの娘は、死ぬまで戦うだろう。復讐のために自分を捨て、使命を捨てて。

それが出来ないなら、死神も隊長も、こちらから願い下げだ。そう言い放つた日番谷冬獅郎の姿が、続いて頭をよぎつた。確かにあの少年なら、自分の信念を貫くためなら、立場も使命も命も、あっさりと投げ打ちそうだ。

なぜ、それほど簡単に捨てられるのだろう。

自分が死に物狂いで長年修行を続け、やつと射止めた「隊長」という一文字の重みが、なぜこうも違う。

生まれながら隊長になりうる靈圧に恵まれたあの少年にとつて見れば、当然の成り行きだということなのか？

簡単に手に入れたから、執着するほどでもないと、そういうことなのだろうか。

碎蜂は、自室の部屋の戸を開けた。

月の光が差し込み、灯りを入れなくとも、調度の輪郭ははっきりと分かる。

棚の上においてある、1人の女の写真に向かつて、歩み寄る。

それは、褐色の肌を持ち、黒曜石のように黒く輝く瞳を持つ、1人

の女の姿。

碎蜂が唯一憧れ、焦がれた女。

「夜一樣・・・」

あなたも。そうだったのか。

愛する男のためには、隠密機動の長たる矜持も、死神たる誇りも、無意味なものなのか。

だから私にも何も告げぬまま、ソウル・ソサエティから失踪したのか？

碎蜂は、その写真から目を逸らす。次の瞬間、
バキン！！

碎蜂の拳が、写真を直撃する。額が音を立てて壊れた。

「感情など死神には必要ない・・・」

そう呟く。

その言葉が誰に当たったものかは、自分でも分からなかつた。月光が、割れたガラスを冷たく光らせ、碎蜂はしばらく視線を落としたままでいた。

「惜しいな。こんな美しい月は、母さんとも一緒に見たかった」草一本残さず燃え尽きた庭の向こうに、煌々と月が輝いている。その縁側で、清十郎と揚羽は酒を酌み交わしていた。

揚羽は黙つて微笑み、清十郎の杯に酒を注いだ。

「・・・まあ、自業自得だな。

これまで何百と人を殺してきた。お前が生まれる、ずっと前だがな「でも！仲間とか、この街を護るために仕方なかつたんじやない！」

清十郎は、一生懸命言い返す揚羽の剣幕に、ふう、息をついた。

「そうだった時も、そうでない時もあった

「そうでない時って……」

「バカな時もあつたつてことだ。今は違うとしても、過去は消えない

い

揚羽は、父親の顔を見上げた。それはなぜか、清清しく見えた。

「ここにいる奴等には、その意味じゃ皆殺される理由がある。覚悟もある。

でも……お前だけは違つんだよ、揚羽

揚羽は無言で、首を振つた。

「本当にバカ娘が……」

言葉とは裏腹に、その声は優しい。

「戻つて来いといったときに戻らず、こんな時ばかり戻つてくるとはな。

・・・逃げてくれ、と頼んでもムダなのか

「ムダよ」

即座に揚羽は返した。

「父様までいなくなつたら、誰が心からあたしを心配して、怒つてくれるの？あたしを一人にしないで」

清十郎は無言で揚羽を見返す。

娘の顔に浮かんだ不思議な微笑の正体を見抜こうとするよいつこ。

「揚羽」

食い入るように、じつと目に見入つている揚羽を見て、清十郎は突然焦燥にかられる。

「揚羽！」

一度目の声に、振り返る。

「『諦めるな』。母さんが言い残した言葉だ。

戦いに参加するなり、この言葉を護ると誓え。決して・・・生きるのを諦めないと」

「ええ」

揚羽は瞳を閉じる。

「諦めたり・・・しないわ。最後まで」

そして、揚羽はスッと立ち上がる。

「もう寝るわ、あたし。父様も疲れてるでしょう、休んでね」

「ああ・・・おやすみ」

「おやすみ」

遠ざかっていく揚羽の足音を聞きながら、清十郎はふと顔をゆがめた。

おやすみ、か。

次「おやすみ」と言い交わすことは、もう無いような気がした。

揚羽は自室の障子を開けたあと、見慣れた自分の部屋に足を踏み入らず、立ちつくしたままでいた。

視線の先で、壁に立てかけた錫杖が月光に冷たく光っていた。

力で誰かを脅してゐるのには違ひはないでしょ？

遙か昔に感じるが、今日の僕、自分自身が言つた言葉が胸に蘇つた。

無理やり力で押さえつけたって、いつかは更に強い力に負けてしまつと思つた。

「だから・・・力は嫌い」

声に出して呟いて、唇間とはあまりに違つ自分の聲音で、我に返る。

死神が本気でかかつてきたり、勝ち田がないことなんて皆分かっている。

あたしは、分かっていた。

力で誰かを押さえつけられれば、いつかは自分たちが同じ田に会つ」と力を。

むしろ理解していなかつたのは、あたし自身がどういう女かということだ。

力で周囲を押さえつけた罰が下つたとしても、それでもあたしは皆を殺させたくない。

揚羽は部屋に歩み入り、まっすぐに錫杖のもとへと向かう。

錫杖を手にして見下ろすと、それは鋭利な刃物のようにギラリと光を放つた。

ヒュン、と錫杖を一振りした揚羽の田には、もう迷いはない。

清十郎は、最後の酒の一口を味わい、ふう、と息をついた。ふと見上げた月を見て、思わず体の動きが止まる。

月の前に微動だにせず、体をこちらに向けて屋根の上に立つ人影を見つけたからだ。

月光の前でも影にならない髪が、きらきらと銀色に光っていた。

「お前は・・・昼間の」

「日番谷冬獅郎」

「隊長だな」

死霸装の上に羽織つた隊長である証・・・隊首羽織を見て、清十郎は咳く。

死神の中でも最も嫌な敵、冰雪系の力の持ち主。

巧妙に靈圧を隠しているのだろう。田に見える位置にいても、靈圧は全く感じなかつた。

何をしにでてきた・・・

「氣配を消しながら、自分の前にだけ姿を現す理由がわからない。そう思つたとき。

「天道清十郎。お前に話がある」

その蒼碧の瞳が、まっすぐに清十郎を見た。

翌日、2月20日早朝。

「思いのほか、人数は少ないですね。40人というところですか」屋根から遠眼鏡で門の外をうかがっていた僧が、清十郎と揚羽に声をかけた。

「先頭には誰がいる？」

「3人ですね。更木・・・剣八。ケンバチそして横にいる銀髪は、市丸ギンでしょう。

もう一人は志波海燕。シバカイエンこの男は十三番隊の副隊長ですが、隊長の浮竹十四郎の姿は見えません」

更木、の名を聞いた、僧たちの表情が一様に曇る。

剣神と呼ばれる更木の噂は、流魂街にも知れ渡っていたからだ。鬼のように強く凶悪で、その上決して倒れないという。

「更木剣八とは、俺がやろう」

清十郎が立ち上がった。

「しかし、清十郎様。

昨日揚羽様が戦つたという氷雪系の力を持つ者が・・・この戦いに来ないはずがない」

その言葉を聞き、揚羽が視線を伏せる。しかし清十郎は首を振った。

「その男は、ここには来ない」

「え？でも・・・」

揚羽がその言葉に目を見開き、もの言いたげに父親を見あげた。

「皆、屋根の上に出てくれ。目にもの見せてくれる」

清十郎は周囲に呼びかけると、立ち上がった。

「おう！」

50人の僧達が、身軽な動きで屋根の上に散る。
そして、錫杖を一斉に門外に立つ死神達に向けた。

「撃エツ！」

清十郎の声と同時に、彼らの錫杖から炎が噴き出す。
50人分の炎は、圧倒的な大きさまで膨れ上がり、一気に死神たち
を覆い隠した。

「なんだ、口ほどにもない・・・」

僧達の1人が呟いた、刹那。

「父様つ！」

揚羽の鋭い声がその場を貫く。

炎の中から、何かが凄まじい勢いで飛んできた、よう見えた。
それが、生き物のように伸びる刀身だと気づいたときには、その切
つ先は既に清十郎の眼前まで迫っていた。

ガキンッ！

激しい金属音を立て、交差する。

「揚羽！」

間一髪、それを受け止めたのは揚羽だった。

すごい怪力・・・

苦しげに顔をゆがめながら、

「流炎！」

力ある言葉を叫ぶ。その言葉と同時に、ひときわ紅い炎が刀を伝お
うとする。

その炎を避けるように、急速に刀身が縮み、炎は途中で立ち消えた。

「やはり、一筋縄ではいかんか」

清十郎が眼下を見下ろした。

炎が晴れた先に見えたのは、焼き尽くされた死神たちの姿ではなく・

・・

無傷の彼らの間に創生された、結界が炎を跳ね返した姿だった。

「水結界、か」

死神たちの一一番前に立ち斬魂刀を構えているのは、志波海燕。大きく斬魂刀を一振りすると、その結界が霧散した。

「市丸、てめえ！俺より先走るんじゃねえ！」

「しょうがないやん。隙だらけやつたんやから」

「こんな時に言い合ひてどうするの、ギン！」

市丸と更木に返した女の声に、揚羽は目を凝らす。

あれは・・・

松本乱菊。間違いない。

本当にいないの？

その近くにいるはずの、日番谷冬獅郎の姿がなかつた。ほっとした、というのがその瞬間に思ったことだった。

天敵になりうる能力を持つ以上、命の取りあいは避けられない。

でも。

あの、他のどこにも見つけられない、蒼碧色を思い出す。

あの瞬間に感じた、探していたものを見つけたような気持ち。そこまで考えて、揚羽はあてどもない考えを頭から振り落つた。

「かかるぞ、てめえらー！」

更木の野卑な声に、揚羽は我に返る。

「作戦通り行くぞ、お前達！」

清十郎が間髪要れず僧達に叫ぶ。僧達は頷くと、次々と建物の中に消えた。

「俺たちに続け！」

先陣を切つて、建物内に乗り込んだのは、一角、弓親。十一番隊の席官である。

玄関から足を踏み入れた途端、ふたりは絶句する。

「なんてこつた、あいつら・・・自分の建物に火つけやがった」玄関から先は、すでに火の海だったからだ。

「どうなつてんだ？ あいつら建物の中に入つてつただろ。まさかもう・・・」

「いや、一角。よく見てみなよ。

この建物・・・炎に捲かれてはいるものの、全く燃えていないだろ。恐らく結界が張られ保護されているんだろう」

弓親は、腕を眼前にかざし、チリチリと身を焼く炎から顔を護りながら言つた。

「そして。碎蜂隊長が言つていた。ここの僧達は・・・」
そう「親が続けようとしたときだつた。一ヤリ、と笑い、一角が斬魂刀を前に構えた。

「そつから先は、もう分かつたぜ」

炎の中で、ゆらり、と人影がゆらめいたように見えた。

次の瞬間、炎の中から僧が3名、一斉に飛び出すと同時に炎を放つた。

「ちつ！」

一角と弓親は俊敏な動きでそれを避けたが、後ろにいた数名は炎に吹き飛ばされ、

自分の服に燃えついた炎に、悲鳴を上げて地面を転がつた。

「てめえら！」

一角が踏み込み、刀を振り下ろそうとしたとき、僧達は炎の中に入

ツと姿を隠した。

「ちくしょう、ストレスたまる戦いだぜ・・・」

炎の中では、追つていいくこともできない。

「市丸隊長とか、間合いが長いタイプなら反撃できるんだだけね。市丸隊長は？」

弓親が背後を振り返ったが、隊員たちはそろって首を振った。その時。

「なにボサツとしてやがるんだ！お前ら！」

ズカズカと玄関に足を踏み入れたのは、隊長の更木だつた。

「やつほー！」

その肩から姿を現したのは、副隊長の草鹿やちる。

「剣ちゃん！玄関から入るときは草履脱がなきやダメだよ！」

「つるせえよ」

あまりに場違いな発言に、更木が口を剥いてやちるを見やつた。そのやちるの肩には、こんな季節には明らかに不自然な黒い揚羽蝶が止まつていて。

「何をしている、さつさと侵入しろ！」

その蝶から、碎蜂の声が発せられる。

「うるせえ、てめえは高みの見物してろ」

更木はチツと舌うちをすると、斬魂刀を鞘から抜き放つ。

それは、長い間手入れもされないため刃こぼれが酷く、ノコギリの歯のように欠けている。

「おらあつ！」

更木は野卑な叫びと共に、斬魂刀を一閃させた。

その風圧で炎が撒き散らされ、一角達は顔を腕でかばつた。

彼らの前に炎がブスブスとくすぶる廊下が、ゆっくりと姿を見せた。

「ホラ、行くぞ！」

顔を思わず見合せた一角と弓親を尻目に、更木は何のためらいもなく、建物内に足を踏み入れた。

「水天逆巻け、ねじはな捩花！」

海燕の凛とした声が響き、斬魂刀から放出された水が、炎を一気に押し戻した。

「ここはどの辺だ？」

汗だくになりながら、海燕が後ろについた死神達に怒鳴った。

「そろそろ中心部です！しかし、このままでは・・・」

海燕は返事をせず、汗を拭つた。

途切れなく次々と湧き出す炎。

そして、炎の中からいつ飛び出してくるとも知れぬ僧たち。もし自分が力尽きれば、後から来ている十人ほどの死神全てが一巻の終わりだろう。

「くつ！」

自分に振り下ろされた錫杖を、海燕は鋭い動きでかわした。

敵のやつら、分かつてゐるな。

攻撃が自分に集中しつつある。

「何だ？震えてんのか？お前ら」

炎の中から、声が聞こえた。続いて、笑いざざめくような声も。

「死神の癖に、死ぬのが怖えのかよ」

海燕は、隣で正体を失つたかのように震える部下の肩をぽんと叩く。

「大丈夫だ」

確かにこの温度、この状況、怖くなつても仕方がない場面だ。

その時。海燕は、見知つた靈圧に思わず声をかけた。

「更木隊長！」

返事の代わりに、凄まじい衝撃波が海燕たちを襲つた。

炎の中にいた気配がスッと消え、海燕たちの周囲の炎が吹き散らされる。

「追いついたぜ」

姿を現した更木だが、その顔といわば腕といわば全身に火傷の跡があつた。

後について現れた、十一番隊士も似たようなものである。

「このままでは危ないですね」

更木と背中合わせに刀を構え、海燕が言った。

チツ、と更木が舌打ちをし、炎に捲かれる建物を見まわした。

「何やつてんだ、あのガキは・・・」

その瞬間、炎の中から疾風のよつに人影が飛び出し、唐竹割に更木の頭に打ち下ろした。

シャン、と更木の頭につけられた鈴が鳴り、身を翻した更木が繰り出した一撃と、打ち下ろされた一撃が激しく交差する。

「更木剣八。ここで死んでもらう」

それは、別人のように目を爛々と光らせた清十郎だった。

フン、と更木は満足そうに笑うと、飛び下がった清十郎に刀を向けた。

「抹香くせえ坊主と戦うのかと思つてたら、まんざらでもねえ。てめえらからは血のにおいがする」

「否定はせぬよ。こちとら元は野盗の身だ」

「ほお。野盗が坊主を名乗るとは、とんだペテンだな」

言葉を交わしながらも、激しく打ち合つ。2人が打ち合つたびに、金属の破片が周囲に飛び散つた。

「戦いに疲れた俺たちを、この街は受け入れてくれた。

この街に根を下ろし、護つて暮らすのも悪くないと思つたのさ」

「一度修羅の道に身を落した奴等は、他のものにはなれねえんだよ

火花が散る中、更木の言葉に、清十郎はかすかに微笑んだ。

「確かに。一理ある」

「おーおー、やつてはるなア」

建物の外から、燃え盛る建物内をみやつた市丸は、熱氣にイヤそうに顔を引いた。

「あたしの傍にぐつこしてどうさんによ。ちゃんと働きなさい!」

「乱菊がそんなこと言つようになるやなんて・・・」

市丸は乱菊の小麦色の頭を見下ろし、ため息をついた。

「あんたんとこの隊長にそのまんま返すわ。このまま出ていんかつたら、死人が出るで」

「うちの隊長は仲間を見捨てたりしないわ

「睨むなや」

猫のような乱菊の両目が釣りあがるのを見て、市丸は顔の前で手を振つた。

「市丸! 戦況を報告しろ」

その声に、2人は顔を上げる。

そこには、やきほじやちるの肩にいたのと全く同じ姿の黒揚羽が舞つていた。

「まあ、ボチボチやな

「適当なことを言つな!」

「建物内全てに火が回つています。

志波副隊長の働きで炎を撃退してはいますが、そろそろ限界かと」

「日番谷は何をしている!」

碎蜂の声に、苛立ちが募る。乱菊は、ぎりりと歯をかみ締めた。

「ただな、ちょっと気がついたんやけど」

沈黙を破つたのは市丸だった。そして、堀の上を指差す。

「あそこへ、田畠谷隊長はんの靈圧がかすかに残ってるんはなんでや？」「ひ？」

「え？」

市丸の指差すほうを見た乱菊の表情が凍りつく。

「今さつき現れたってほどでもなく、そんな昔でもない。言つてみれば昨晩、くらいやな。

おかしいよなあ。精靈邸で戦闘準備を整えてたはずの時間に、こんなトコで何をしてたんやろな」

「まさか、田畠谷の奴・・・」

「大事な話をしてたんかもな。ここのにいる誰かさんと」

「適當なこと言わないで！」

市丸と碎蜂の会話に耐え切れず、乱菊が激しい勢いで遮る。

市丸は、笑みさえ浮かべて乱菊を見下ろした。

「でも、乱菊も知らんかったんやろ？」の田畠谷はんの行動

「・・・！」

乱菊がぐつと言葉に詰まる。

その時。ふたりの頭上に、影が差した。
見上げた市丸がほくそ笑んだ。

「いやあ、可愛い娘やなあ。こんなトコで何・・・」

市丸の言葉は、途中で遮られる。

娘が手にした錫杖から、一瞬にして巨大な炎が放たれたからだ。

市丸は乱菊の肩を掴み、後方に飛び下がる。

「なんや、あの時ボクの刀を受け止めた娘か」

「あたしは天道揚羽」

乱菊が息を飲んで、その姿を見やつた。

それこそ炎のようにたきる瞳をまつすぐに市丸に向け、揚羽は言い放つた。

「次は叩き折つてみせるわ。その斬魂刀を」

その頃。

燃え盛る天道教本山を見下ろしている3人の人影が樹上にあった。炎の暑さが届くほどではないが、夜目に燃え盛るその炎は、まるで天の怒りのように見えた。

ひとりわ高い枝に腰を下ろし、炎を見つめる少年の髪は、今は朱色に輝いている。

「隊長・・・日番谷隊長！」

頭上を見上げ、黒髪の小柄な女死神が、凛とした声を張り上げた。

「よろしいのですか？」

日番谷は、自分を見上げる朽木ルキアの黒く輝く瞳を見下ろした。その隣で、不安げに成り行きを見守る、虎徹勇音の姿も。しかし無言のまま、再び炎に視線を転じた。

「射殺せ、神鎧！」

「狂炎！」

男女の言葉が、炎の中に木霊する。

市丸が手にした脇差の刀身が、目に留まらぬ勢いで伸びた。

それと同時に、後方に飛び下がる。炎が、市丸がさつきまでいた地面を舐めた。

「ちつ！」

揚羽も軽やかな動きで、炎の中から弾丸のように飛んできた刀身を交わした。

そのまま炎が渦巻く屋根の上に降りた。

それは、まるで舞っているかのように優雅に見える。

すごい、この娘・・・

それを見守っていた乱菊は、彼女の動きに舌を捲く。
天才と呼ばれた市丸が斬魂刀を始解してもなお、その動きについて
いつている。

流魂街で、特に訓練も受けていないはずの娘が、百戦錬磨揃いの隊
長格と互角だなんて。

この娘はおそらく、市丸をもじのぐほどの才能の持ち主なのだろう。

「ただ、別嬪さんではあるけど、やっぱり経験が足らんなあ。

炎をいつまでも出してればいいともんちゃうで」

更に炎を打ち付けるように放出した揚羽に向かって、市丸がニヤリ
と笑つた。

「鎌鼬！」

手のひらを上に差し出す。

その上に、風が巻き起こつたが、炎に遮られて揚羽の手には留ま
まい。

「なに？」

炎にいくつも切れ目が入り、揚羽は目を見開く。

揚羽が正体に気づくよりも早く、その真空の刃は揚羽に襲い掛かっ
た。

「・・・ホラ。言つたとおりや」

炎が散つたあと、市丸は視界に現れた揚羽を見下ろした。

その肩と足に、交わしきれなかつた真空の刃が傷を残している。

鮮血が腕を伝わり、ポタリ、と地面に落ちた。

地面に片膝をつき、手のひらで肩を押さえて、揚羽は苦しげに息を
ついた。

その体勢のまま、その錫杖を大きく後ろに振りかぶる。

「だから。炎はやめとき・・・ていっても、それ以外の技がないか
市丸の声に、揚羽はかすかに笑みを浮かべた。

「行くぞ！」

声と共に、中空に飛び、錫杖を一閃させる。

「射殺せ、神鎗」

市丸の余裕の声がそれにかぶさる。

視界を覆つほどの炎と、刃が行きかい・・・

見守る乱菊の頬に、上空からポタリ、と血が落ちる。

「投降しなさい、揚羽！」

思わず乱菊は叫び、一歩踏み出していた。

街で踊り娘として暮らしていた揚羽なら、わずかだが死罪を免れる可能性は残っている。

その時、炎の中から凛とした声が響いた。

「破道の四十四、氷走！」

なに？

そう思うよりも先に、市丸の刀身がビシビシと音を立てて凍り付いてゆく。

一気に炎が晴れた先に、揚羽の姿が見えた。

神鎗の切つ先は、揚羽の右手のひらの真ん中を貫いていた。

その右手と、添えた左手で神鎗を受け止め、鬼道を放つたのだ。

揚羽は歯を食いしばって右手を刀身から引き抜いた。
ふつ、とその姿が焼き消える。

「ギン！」

乱菊は思わず叫んでいた。

その乱菊の眼前に、揚羽の姿が現れる。

地に伏せるような体勢から全身に力を入れ、錫杖を神鎗に向かって打ち上げた。

ビシッ！

あっけなく神鎗の刀身に鱗が入り、いくつかの破片に別れて砕け散るのを、乱菊は啞然として眺めた。

「言つたでしょ。その刀叩き折つてやるつて」
立ち上がつた揚羽は、体のあちこちから血を流しながらも、爛々と輝く瞳で市丸を見上げた。

「なるほど。何度も熱された後に氷雪系の力使われたら、さすがの神鎗でもたまらん」

間合いを取り下がつた市丸が、根元から折れた神鎗を鞘に収めた。

そして、後ろに舞つ黒揚羽を見上げる。

「碎蜂隊長、すんませんな。負けてもた」

「日番谷の靈圧も補足出来ぬ上、連絡もつかん。

しかたない・・・本隊、突撃の準備を!」

乱菊が市丸の前に踏み出し、斬魂刀を構える。
揚羽がそれを見て、体の向きを乱菊に変えた。

「こんな風に再会したくはなかつたわね。

あんた、踊つてるほうが似合つてたわよ」

「讃め言葉と取つておくわ」

そう言いながら、錫杖の先を乱菊へと向ける。

「本当よ。あの隊長が、誰かに見惚れるとこがなんて、初めてみた
もの」

「何が言いたいの?」

「日番谷隊長は、何とかあんたを護ろうとしてた。

その気持ちは今でも変わってないわ。たとえ何があつても
しゃらん、と炎の中で、錫杖がかすかに鳴る。

その涼やかな音に、ふと揚羽が錫杖に目を落した。

氷輪丸の刀身に、白銀の光がギラリと渡る。
それを間近にした朽木ルキアと虎徹勇音は、「ゴクリと唾を飲み込んだ。

氷輪・・・凍てついた冬空に架かる月との名を持つその斬魂刀。
今その刀とその持ち主を、恐怖を呼び起こすほどに強い靈圧が覆い隠そうとしていた。

「市丸の靈圧が急に下がった」

「おそらく斬魂刀を失つたのでしょうか」

日番谷が独り言のように呟いた声に、勇音が返した。
その表情からは、隠しようもない緊張が見て取れる。
ルキアも、堰を切ったかのように日番谷に詰め寄った。
「志波副隊長・・・更木隊長も、もう限界です！」

「知つてている」

樹上で結跏趺坐を組んだ日番谷が、上空に向かつて氷輪丸をかざした。

ルキアと勇音はスラリと刀を鞘から抜き放つと、左右から氷輪丸の刀身に重ねるように刃を置く。

日番谷は、視線の先に燃えさかる寺院と、あちこちでぶつかりあう靈圧を視ると・・・
スツ、と目を閉じた。
「・・・氷結結界」

ピシリ、と。空氣に鱗が入ったかのように、大氣に違和感が走った。

建物内では、更木と海燕が背中合わせの戦いを続けていた。

「日番谷隊長はまだなんですか！」

「つるせえ、黙つてろ！」

一角の声に、更木が声を返す。

普段なら、こんな奴に遅れはとらねえはずが・・・
海燕が歯噛みし、清十郎の攻撃をかわした。

とにかくこの炎が、こちらの攻撃を一切よけつけないので。

パキン。

その時、かすかな音が、炎の中に響いた。

「なんだ？」

海燕は、音のしたほうを見やる。

炎の中でも傷一つ付いていない欄間の一角が、キラリと白い光を放つていた。

「こ・・・氷？」

それに気づいた僧の1人が、思わず声を上げる。

次の瞬間。炎が霧散した。

天井が、床が、襖が、障子が。突如薄い氷に包まれていく。

「なにごとだ！」

姿を現した僧達が、初めて慌てふためいた様子を見せた。

「これは・・・氷雪系の結界か！」

清十郎も更木と海燕から飛び下がり、あたりを見回す。

更木が、ニヤリと笑つた。

「待たせやがつて、あのガキ大将が・・・」

「碎蜂隊長！今です」

海燕は黒揚羽に向かつて叫ぶ。

「置み掛ける！」

続く碎蜂の声は、黒揚羽からではなく・・・外から聞こえた。

「清十郎様、新手が上から仕掛け来ました！先頭はあの女です！」

その声に、清十郎は更木と海燕を尻目に、外へと一気に駆け出した。

清十郎の目に、山の裏手から一気に駆け下りてくる、30名近い隠密鬼道の姿と、先頭に立つ碎蜂の姿が映つた。

「碎蜂！白羽の仇を討たせてもらひうぞ！」

隊長・・・！

乱菊は、結界の中に紛れもない日番谷の靈圧を感じ取つた。
自分が行かねば、部下や仲間は炎にまかれて息絶える。
自分が行けば、死神は助かるが、揚羽たち天道教はその場で死ぬか、
生き残つても精靈廷で死罪となる。

日番谷の性格なら選べないはずのこの選択肢から、無情ともいえる
決断を下した苦渋を思うと、心が痛んだ。

目の前の揚羽は、右手の痛みにも気づかないのか、両方の拳をぎゅ
っと握り、結界の源・・・南の上空に目をやつていた。
気づいているのだろう。この結界を創りだしているのが誰なのか。

「揚羽！揚羽はあるか！」

建物内から、清十郎の声が響き、揚羽は弾かれたように顔を上げた。

「父様！無事で・・・！」

「揚羽、お前はあの結界の源に向かえ！あれを切り崩さねば、我ら
の勝利はない！」

「・・・分かつたわ」

揚羽は身を翻し、壙の上に飛び移るつとしたが・・・
そのすぐ上に現れた乱菊が、打ち落とすよに揚羽の頭上から斬魂
刀を振るつた。

「・・・行かせない」

壙の上に代わりに降り立つた乱菊が斬魂刀を構え、地面に落された
揚羽と向き合つた。

「ムリ、と言つたはず」

その揚羽の視線の先で、乱菊の斬魂刀が、ドロリ、と突然溶けた。

「な・・・」

目を剥く乱菊の真横に瞬歩で移動し、手刀をその首元に見舞う。

「揚羽！・・・」

苦痛に表情をゆがませ、乱菊が揚羽に怒鳴つたときには、揚羽の背
中は既に小さくなつていた。

松本。無事だつたか・・・

揚羽とぶつかつた乱菊の靈圧を感じ取り、日番谷は心中ほつと息を
ついた。

少し離れれば尚更よく分かるが、乱菊と揚羽の靈圧では、明らかに
揚羽に分がつた。

「虎徹、朽木。このまま結界を維持していろ。もうすぐ第一二段階に
入る」

日番谷は両脇に控える二人にそつ告げると、抜き身の氷輪丸をだら
りと下げる立ち上がつた。

「え？ 日番谷隊長、どちらへ・・・？」

勇音がそつ言いかけたときだつた。

「何者・・・」

「ぐつ・・・」

木の下から、次々と悲鳴が上がった。

「あれは・・・警備兵たちか！」

ルキアが慌てて見下ろしたが、木の下は影に覆われ、樹上からは全く様子が分からぬ。

「ここにいる」

日番谷は2人に言い残すと、ふわり、と枝から下へ舞い降りた。

「ひつ・・・」

勇音が下を見やつたとき、下から弾丸のように何かが上昇してくるのが見えた。

風を鳴らして飛び降りた日番谷が、空中で刀を振りかぶる。

ガキン！！

中空で2人の刀と錫杖が斬り結び、2人とも近くの枝へ着地する。その緋色の着物を見て、日番谷はふと、昨日のことを思い出す。ひらり、と軽やかに翻る鮮やかな紅。重さがないかのようにふわり、と舞う肢体。

そして、一点の曇りもない明るい笑み。

出会いつけざえ違えば。立場ざえ違えば。

一瞬全身を貫いたあの気持ちを、持ち続けられたかもしれない。

ゆらり、と揚羽が樹上で立ち上がった。

「それでもまだ、少しばかり信じたのよ、あんたのこと」

「お前が呼んだ通りだ。俺は・・・死神なんだよ」

日番谷が立ち上がり、氷輪丸の切つ先を揚羽へと向けた。

2人の視線が、闇の中でまっすぐに交錯する。

「結界を解きなさい。解かなければ、あんたも地獄へ道連れよ

「望むところだ」

日番谷の刀が青白い光を、揚羽の錫杖が紅い光を放つ。刹那、2人の武器が衝撃音と共にぶつかり合つた。

17. 押し寄せる死

もう何度目だろうか。

碎蜂と清十郎の体が交錯し、シンメトリーのように飛び離れた。

清十郎の腕といわす胸といわす、蝶のような独特な紋様が刻まれていた。

二撃必殺の碎蜂の技の、一打目が刻まれた証拠である。同じ場所で二度食らえば、いかなる相手でも命はない。

わゆが、よく調べられてこぬりしこな。

かすかに鳥を荒けながら、碎蜂が向かい合ひ溝十郎を見やつた。紋様がある箇所を狙おうとするといつもひらりと体をかわし、場

初めから戦い続けたからだつて、清十郎の息は砕蜂よりも遙かに上がつてゐる。

それでも、瞳に浮かんだ憎しみは、まったく陰りがない。

あの、白羽とかいう妻のためか。

「やせしー・・・本当に、やせしい女だつたんだ、白羽は」
不意に、清十郎が顔を伏せた。その表情は、影になつていてよく見えない。

「でもな・・・あの日、白羽と揚羽は大喧嘩をしたんだ。
踊り娘になつて家を出るつていう揚羽を、白羽は何とか止めようとした。

そして最後に白羽が口にしたのが『戻つてこなくていい』。・・・。
後悔してたなあ。

次会つたら、踊り娘になつてもいい、つて言つて抱きしめてやるん

だつて、そう泣いてた。

それが2人の最後の会話だ。もう一度と分かり合えないんだぞ！」

顔を上げた清十郎の表情に、碎蜂は動きを止めた。泣いている。

戦いの最中に、憎しみも恐れも忘れたかのように、ただ、涙を流している。

「お前達にとつてみれば、どれも同じ魂魄に過ぎないのかもしれん。でも、俺達も1人1人生きているんだ！」

分かるか？いきなり日常を断ち切られる苦しみが！大切な人間を失う悲しみが！」

ふつ、と碎蜂の頭に流れ込んできた記憶があつた。

ソウル・ソサエティから追放され、一切の消息を絶つた夜一を思つた何千もの夜のことを。

なぜ、自分も連れて行つてくれなかつたのかと泣きに泣いた、長い長い時間のことを。

「死神には・・・感情は、要らぬ」

ボソリ、と碎蜂は呟いた。

2人の間を断ち切るかのように、建物の柱が唐突に倒れてきた。碎蜂は息を飲み、建物を見やる。

建物が崩れてゆく・・・

それは、日番谷たちの張つた氷結結界が第二段階に進んだことを示す。

天道が長年建物に張り巡らせていた「不燃」の結界が崩れ去つたのだ。

ごつ、と炎が建物から上がり、少しづつ崩れる建物から、死神や僧が次々と飛び出してきた。

「見事な術だ」

それを見上げた清十郎の瞳は、いつそすがすがしかった。その表情は、死に際の白羽を思い出させた。

「田番谷と昨夜、接触したのか……？」

碎蜂は、清十郎に問いかける。それが、気になっていたのだ。初めに田番谷がここにいたと知ったときは、天道側に付き、死神を裏切るつもりかと思った。

しかし、田番谷の行動は蓋をあければ、全て碎蜂が指示した通りで、想像以上と言つてもいい。

清十郎は、炎の中で、少しだけ微笑んだように見えた。

「誰のことかな」

そして、清十郎の足が地面を蹴る。

最後の力を振り絞つて、碎蜂に覆いかぶさるように錫杖を振るつた。対する碎蜂の初動は明らかに遅れていた。しかし、腕は半ば無意識のうちに動いた。

「・・・」

碎蜂の肩に、ずしり、と清十郎の体重が重くのしかかった。

清十郎の胸、蝶の紋様の真ん中に、碎蜂の斬魂刀の先が深く食い込んでいた。

清十郎が、大きく一度、あえぐ。

錫杖を取り落とした手が、空を搔くように、一度大きく動き・・・だらりと垂れた。

「頼む・・・」

崩れ落ちようとする間際、清十郎は碎蜂の腕をがしりと掴んだ。

「どうか、この地に流れる血が・・・」これで最後になるよつ・・・この地を護ってくれ

ヒューヒューと鳴る苦しい息の下で、それだけ言つと、清十郎の腕

から一気に力が抜けた。

無言で立ちつくす碎蜂の真横に、その体が崩れ落ちた。

「あ・・・げ・・・は」

それが、天道清十郎の最期の言葉だった。

碎蜂はやや置いて顔を上げると、周囲を見渡す。

既に、戦況は大きく死神に傾こうとしていた。

揚羽は日番谷から飛び下がると、日番谷の背後を見やつた。すでに、20分以上戦いを続け、一人とも息が弾んでいる。

「とつとま・・・」

その、まだあどけなさが残る唇が、言葉をつむぐ。

日番谷は、間違えもしないその靈圧がふつと、りつりやくの炎のよう

に消えるのを感じ、一瞬の間深く目を閉じた。

啞然としていた揚羽の瞳が、カツと見開かれる。

「どいてっ！」

一喝するが早いが、錫杖を大きく横に払つと、日番谷を脇に押しや

らうとする。

しかし日番谷は揚羽の前に回りこみ、錫杖を斬魂刀で受け止めた。ジリジリと刀と斬魂刀が押し合つ。

「どけっ！あたしが行つたところで、もう戦況は変わらないでしょ

！」

「だから行くなと言つているんだっ！」

日番谷が揚羽に負けず劣らず、激しい口調で言い返す。

それを聞いた揚羽が、一瞬体の動きを止めた。

「なによ・・・それ

見開かれた瞳に、感情はない。

「やさしさのつもりなの・・・？」

「『生きるのを諦めるな』つていうのが・・・お前の父親の遺志だつたんだろ」

揚羽の体から突然力が抜け、錫杖をだらりとぶら下げた。

対する日番谷も、斬魂刀を退く。2人は、至近距離で向き合つた。

「なんで。なんであんたが、父様の言葉を知ってるの……？」

問われても、田番谷は無言のまま揚羽の目を見つめている。

続けた揚羽の言葉は、はっきりと分かるほど震えていた。

「まさか。父様があたしをここにyoこした理由は……？」

「……寺院からお前を引き離すためだ」

「なによ。明日殺しあう敵同士……のくせに、2人してあたしを騙すなんて……」

「それでも、分かりえることがある。

目的が同じだつたからだ。それが何かくらう分かるだらう……」

揚羽は、錫杖を持つていなしの方の手のひらで、ぎゅっと自分の胸を握り締めた。

市丸との戦いで付いた傷のせいで、緋色の着物が血の色に染めなおすれてゆく。

「……そういうこと、なのね」

揚羽は、かすかに口角を上げた。

しかし、田番谷には分かる。こんなのは、この娘の笑みではない。

「それでも。それでも、あたしは……行くわ

全てを断ち切るかのように、錫杖を一振りすると、田番谷に突きつけた。

「あたしは許さない。あんたたち死神を」

殺すか、殺されるか。

覚悟を決めた者の静謐な瞳が、まっすぐに田番谷に向けられる。

人は、名前で呼ばないといけないんじやなかつたのか。

初めて会つたときの、揚羽の言葉が耳に蘇る。

俺たちが唯一つの名前をもつといつことも、死神とか、天道教とかいう立場の前には、意味がないものなのか。

動き始めた歯車は、もう、止まらないのか。

冬の町に咲く鮮やかな花。舞い踊る揚羽。

彼女の琥珀の瞳が、自分の眼を捉えた瞬間を思い出す。

そして花開くように、微笑んだその刹那を。

「覚悟つ！…」

揚羽が錫杖を大きく振り上げ、一足飛びに日番谷の懷に飛び込んだ。

日番谷は、ぎり、と歯をかみ締める。

氷輪丸の柄を握る手に力をこめる。

ごとり。

歯車が、また終末にむけて、動くのが聞こえるように思った。

ひゅつ、と刀と錫杖が空気を裂く。

見上げた日番谷の頬に、ぽつり、と何かが散った。

「・・・！」

泣いて、いる。

歯を食いしばり、瞳をゆがめて。

散る涙を拭いもせず、揚羽は錫杖を振り下ろした。

対する日番谷は、大きく一步、踏み込んだ。

鈍い音が、静まり返った森の中に響き渡った。

鮮血が、揚羽の腕に、体に、頬に、真紅の紋様を描いてゆく。

揚羽は無意識のうちに、倒れ掛かってきた日番谷の体を受け止めていた。

錫杖を握っていた手の平を視界に入れると、それは、真っ赤に染まっていた。

「なんで？」

ぽろり、と言葉が口から零れ落ちた。

口を開こうとした日番谷が、力なく何度も咳き込み、その口元からも血がボタボタと落ちた。

その胸の真ん中を、揚羽の錫杖が貫き、それは背中まで突き抜けていた。

「・・・揚羽」

日番谷は、致命傷を負っているのが信じられないほどの力で、揚羽の肩を捕まえた。

「誰かのために命をかけるには、どれくらいの時間が必要なんだ・・・？」

「なにを・・・なに言つてんのよ！」

「一年か？それとも・・・一生か？」

ゆらり、と日番谷の体が揺れる。

「きっと・・・そんなには、いらねえよな」

揚羽の手から、錫杖がすべり落ちた。

揚羽は膝をつき、倒れこみそつになつた日番谷の体をとつさに支えた。

「わかんないよ・・・そんなの」

揚羽は一回、大きくしゃくりあげた。大粒の涙が、次から次へと頬を伝つた。

「この命を賭けて頼む。・・・生きる」

揚羽は、その場に凍りついたように立ち竦んだ。

今、この瞬間にも、寺院では靈圧がひとつ、また消えた。

しかし、今ここで温いところから、冷たいところへまつすぐに流れ落ちようとしている命がある。

揚羽は、その場から動けずに慟哭した。

19・ただ、分け合えるよつ

2月23日、早朝。
チュンチュン・・・ヒカヒカする雀の声に、日番谷はハツと目を開けた。

真つ先に目に映つたのは、粗末な木を打ちつけただけの天井。
所々隙間が空き、隙間から朝日が差し込んでいた。
きらきらと、埃の細かい粒子が光っている。

体を起こそうとした瞬間、
「動かないで」

感情の伴わない声が、日番谷の動きを止めた。
その時になつてやつと、日番谷は自分の喉に突きつけられた氷輪丸の刃先に気づいた。

「・・・揚羽」

ピクリとも体を動かせないまま、日番谷は揚羽の顔を見上げた。
その顔は、驚くほどやつれていた。
体が一回り小さくなつたように見えるくらいだ。
目の下には暗い影が差し、いつも笑みを湛えていた口元は、引き結ばれている。

日番谷は、目だけを動かして自分の状況を見て取る。
床の上に藁や萱を敷き詰めた上に、自分は寝かされていた。
体の上には、隊首羽織がかけられている。
胸の傷には、包帯が巻かれているらしかつた。
コイツ、俺を助けたのか・・・?

「バカよね、ほんと」

その日番谷の心の声を聞いたかのように、かすれた声で揚羽は呟いた。

「父親じゃなく、仲間じゃなく、あんたを助けるなんて。みんなに手をかけるなら、絶対に容赦しないって……戦いの前には思つてたのに。」

あたし自身がもう、わかんないよ」

日番谷は、氷輪丸の刀身にスッと手をやり、切つ先を自分の首からずらす。

そして、胸の痛みに顔をゆがめながらも、何とか上半身を起こした。揚羽は、抗うことも手を貸すこともせず、ただぼんやりと日番谷を見守つているだけだった。

「戦いは……どうなったんだ？」

日番谷が気を失ったのは、大勢が決してからだつた。

しかし、あれから死神がどうなったのか、天道教がどういう末路をたどったのか、記憶はふつつりと途絶えている。

「殺されたわよ」

揚羽の聲音は、ゾッとするほど平坦だった。

床に向けられた揚羽の視線は、日番谷の顔の上を、まるで風景の一部のように通り過ぎた。

「殺されたのよ、全員。あたし以外1人残らず」

揚羽の細くなつてしまつた腕が、ゆっくりと氷輪丸を床に戻した。怒りを納めた……というよりも、それに意味が見出せない、そんな素振りだった。

ぼんやり、と揚羽は日番谷の顔を見て……そして、焦点が突然、日番谷の顔に合わせられる。

「なんで・・・？」

その表情が、初めて感情をあらわす。揚羽は日番谷の顔を凝視した。

「なんで、あんたが泣くの・・・？」

日番谷は、視線を下に落とすと、唇をかみ締めた。

凍りついたように動かない二人の間で、まるで唯一の生き物のように、涙が、床に落ちた。

反射的にだろう、揚羽の腰が浮いた。

そして、日番谷の胸倉を掴み、ぐつと持ち上げて自分の顔の前に突きつけた。

力の入らない首がガクリと後ろに倒れ、水滴が散った。

「死神が・・・あんたがやつたんじょ！殺したんじょ！あんたに泣く権利なんて・・・！」

「じゃあ、お前が泣けよ！」

日番谷が苦痛に顔をゆがめながらも、激しい勢いで揚羽を怒鳴りつけた。

「お前しか、あいつらの為に泣いてやれる奴はいないんだぞ！」

「泣いて皆が戻つてくるならいくらでも泣いてやるわよ！それでも・・・！」

「人はそんな理由では泣かねえよ・・・」

揚羽の手から、日番谷の死霸装の襟がすべり落ちる。

泣いてもわめいても怒つても、死んだ者は戻つてこない。本当に訴えたい人たちは、もう遠くへ行つてしまった。でもきっと、意味を求めて流れる涙なんてない。

「・・・ひとつ教えて」

随分長く感じた沈黙のあと、かすれた声で揚羽は呟いた。

「父様と話したんでしょ？」

「・・・ああ」

「どうして。あたしだけ生かそつとしたの？」

揚羽に向かっていた日番谷の視線が、その時スッと逸らされた。

迷つてゐるの？

その表情に暗く差し込んだ影の訳を聞こうと揚羽が言葉を挿む前に、
日番谷は口を開いた。

「できれば、俺はお前達全員に逃げてもらいたかった。
でも、お前の父親は。そして、他のやつらも、昔自分たちがやつた
あることを許せなかつたんだ。だから逃げないと言つた」

「あること？」

「そう。あの一族で、お前だけがそれを知らない」

揚羽が眉を顰め、日番谷を見つめる。

2人の視線が、静まり返つた部屋の中で交錯した。

「野盗だつたこと？それは確かに悪いことだけど・・・」

日番谷はその問いには答えない。そうだ、とも、違う、とも。

「何を知つているの？あんた・・・」

「俺にわかるのは、お前の父親と母親が、お前のことを本当に大事
に思つてたつてことだけだよ」

「あんたに、何が・・・」

「分かるさ。お前がここに生きてゐることがその証拠だらうが」

揚羽が無表情が凍りつき、床に視線を落す。

ゆがんだ口元から、吐息のような声が・・・すぐに、嗚咽が漏れた。
それは、一旦涙を見せたが最期、一度と止まらないんだとでもいう
ように。

必死に喉の奥に慟哭を押し込めようとしていた。

日番谷は無言で、揚羽に手を伸ばす。

その頭を、ぐつと自分の肩に押し付けた。

「バカ・・・ね。あんただって泣いてるじゃない」

温かい涙が、日番谷の肩を濡らしてゆく。

日番谷は、微動だにせずに、揚羽を抱きしめ続けた。

その痛みを、少しでも分け合えるよう。

2月28日。朝。

田番谷は、旅支度をする揚羽の姿を、何となく見つめていた。本調子には程遠いが、歩くくらいなら支障はないくらいに、その体は回復していた。

「どうすんだよ、これから

田番谷の声に、揚羽は微笑を浮かべて振り向いた。瘦せてしまつてはいるが、その顔に数日前にあつた影は、薄らいでいる。

「天道教が没落してから、この辺りはやつぱり治安が悪くなつてゐみたい。

あたしは、あたしの出来ることをやるわ

「できることって、何だよ

「あたしは踊り娘よ？暗い時だから尚更、踊つてみんなを笑わせるの

「変わらねえな、お前は

田番谷は、口角を上げて揚羽を覗む。

揚羽は、帯をキュッと締めなおしながら続けた。

「母様の反対は凄かつたわよ、最後まで。

でもきっと母様なら、心の底では、踊り娘になることを認めてくれてたとあたしは思つてゐ

「お前が、ばあちゃんのために何かをがまんするのが、一番つ

田番谷は、それを聞いて、一度だけ深く頷く。

自分を育ててくれた祖母も、死神になりたいと言い出した時、自分が1人きりになるのが分かつていても、認めてくれた。

お前が、ばあちゃんのために何かをがまんするのが、一番つ

らい。

そういうてくれた時の穏やかな表情を思い出す。
家族なら。死がふたりを分かつとも、その言葉はいつまでも届き続
けると思いたい。

「だから・・・」

揚羽は日番谷に歩み寄ると、手にしていた錫杖を日番谷に手渡した。

「なんだ？」

「預かつてて」

あっけに取られた表情の日番谷を、揚羽は微笑んで見下ろす。

「あたしは、もう一度とこの錫杖を使わない。

踊り娘として、みんなが幸せになれる方法を探すわ。

だから、冬獅郎に持つて欲しいの。あたしが誓った証拠として

「ああ」

日番谷は錫杖を受け取ると、揚羽に視線を戻す。

「聞かないんだな。お前の父親が死を選んだ理由を」

「聞いたって言わないでしょ」

即座に揚羽はそつ返した。言葉に、以前のよつた機転が戻ってきて
いる。

「それに。父様やあんたが言わないのには、きっとそれだけの理由
があるはず。だからあたしは聞かない

「・・・そつか」

揚羽の瞳に浮かんだ労わりにも似た感情に、日番谷はかすかに顔を
ゆがめ、うつむいた。

もうじき去る自分に何か言おうとしているのに、きっと言葉になら
ないのだろう。

むくれた子供のよつとも見えるその表情に、揚羽からふつと笑みが
こぼれた。

額にかかつたその銀髪を指で払う。

怪訝な表情で自分を見上げた日番谷の顔が近くなり
揚羽は、日番谷の額にポツンと唇を落した。

ポカン、と田と口を見開いた日番谷の顔を見て、思わず声を立てて
笑い出す。

「なかなか見事な男つぱりだったわよ、あんた」

そのまま立ち上ると、くるじと日番谷に背を向けた。

「おっ、おー！揚羽！」

そのまま戸口から外に出ようとした揚羽に、日番谷が慌てて声をか
ける。

「何か、俺にできる」とはないのかよー」

「そうね」

揚羽はちょっとだけ振り返る。

「また会える？」

「当たり前だ！..」

即座に返した日番谷の声に、無邪気な笑みを返す。
傷の癒えた右手を上げて空中でヒラヒラ、と振り、入り口の戸を引
きあけた。

光あふれる外の景色は田く、旅立つ揚羽の姿は、額縁に入った絵の
よう日に日番谷の脳裏に焼きついた。

同日、午後。

日番谷は、天道教の跡地へと辿り着いていた。

寺院は見るも無残に燃え尽き、大黒柱でさえ、その原型をとどめる
のみだった。

辺りは煤であふれ、風が吹くたびに黒く舞い上がった。

転がっていたはずの死体は、恐らく死神たちが埋葬したのだろう。

どこにも見当たらなかつた。

あいつらは・・・

聖人じやなかつたし、だからといつて悪人でもなかつた。ただ、仲間を想い、娘を想う、自分たちと同じ人間だつた。

人生にたつた一度、許せないことがあつたくらいでこんな結末を迎えるような・・・

そんなバカな生き方を貰いた、ただの人間だつた。

「俺だつたら・・・」

日番谷は無意識にそう呟いて、自分の声に我に返つたかのように黙り込んだ。

しばらくして、わずかに首を横に振る。

真摯な瞳で自分の言葉を聞いた、清十郎の表情がチラリと頭をよぎつていた。

それ以上思いつく言葉もなく、日番谷は歩みを進めた。

その時、その視線がふと、少し離れたところに見える背中を捉えた。日番谷は、歩みを止めず、地面にしゃがみこんだその人物の後ろまで歩み寄る。

「碎蜂。何をしてる

日番谷がここに来たことをとっくに気づいていたはずの碎蜂は、声をかけられても尚振り向こうとしなかつた。

なんだ？

日番谷は碎蜂の背中越しに、地面を覗き込む。

かすかに桜色がかつた、名前も知らない小さな花が一輪。焦げ付いた地面の上に、手向けられていた。

「もう、花が咲いていたのだ。春が來るのだな」

その聲音は、日番谷がこれまで聞いた碎蜂のどの言葉よりも、穏やかだった。

そして肩越しに振り返った碎蜂の瞳が、日番谷の持つ錫杖に吸い寄せられた。

「その錫杖。あの娘の靈圧が強く残っている。・・・逃がしたのか立ち上がった碎蜂の眼前に、日番谷は無言で錫杖を突きつけた。

「あいつは、天道教が遺した最後の希望なんだ。絶対に、殺させない」

無言のまま、日番谷と碎蜂は見つめあった。

ボロボロだな。

一瞥して碎蜂はそう思う。

着物の胸の部分には穴が開き、乾いた血で固まっている。

足元すらおぼつかない状態で自分と戯り合つて、勝てるはずもないだろうに。

それでもこの男は、一瞬の迷いもなく戦おうとするのだろう。

「死神の役割は、人を護ることだろ」

数日前、日番谷が怒鳴つてよこした言葉が、耳に蘇つた。

その想いが、一旦回りだした歯車を、最後の最後で止めたのかもしれない。

「・・・碎蜂隊長」

沈黙を破つたのは、近くに止まつていた黒揚羽だった。

「北流魂街B1457地区に野盗が出現、街を襲っています！」

「分かった。私がでる」

日番谷は、不思議なものを見るような視線を碎蜂に向けた。

「碎蜂？」

「貴様とやりあうだけ時間の無駄だ、ということは既に学んでいる

相変わらずの無表情でそういうと、碎蜂は日番谷に背を向けた。

「初めから言つているとおりだ。北流魂街は必ず護る。それが私の役割だ」

ちらり、と足元の花に目を落す。

そして、碎蜂は瞬歩でその場から姿を消した。

ひとり、その場に残された日番谷。

ひゅうつ、と冷たい風が吹き抜けるが、その風の中には、かすかに花の香りも混ざつていていた。

今は最も寒い時期だが、春はもうすぐ傍まで近づいてくる。願わくば、またあの娘が軽やかに舞える季節がくるよう。かすかに微笑むと、日番谷は精霊廷の方角を見る。そして強い瞳で、その一步を踏み出した。

bleach in flame fin.

20・春を望む（後書き）

読んでくれた皆さん、ありがとうございました～こました^ ^
着想は「フラガール」から。

頭のビードをビード通りに通つたら、こんな暗い話になるのかといつのは、ナイ
シヨ。
続編構想中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5405d/>

BLEACH in FLAME - 晩冬の踊り娘 -

2010年10月9日20時20分発行